

拜啓一書御内々御下ケニ相成候由に六日夜竹木が相廻り謹み拜見仕候御意之通八朔も嵐無御座尙又二百十日も無事旁豊作と奉恐悦候辰年以來姦物黨を結び云々之儀御嘆息之趣奉恐入候右に付愚臣儀當節心得振委細 御傳授被成下冥加至極難有仕合奉存候

一何事も古役共ニさからひ不申様但御封書并呈書等萬一開封の評議も御座候ハ、鈴伊等爲ニ相成間敷と申廉にて申談候様可仕旨乍恐名人げいに何共安心不仕候へ共當分の模様御鐵炮御用の中ニいろ／＼申上り候とハ疑ひ候へ共まさか年寄部やにおゐて開封等のきざしハ相見へ不申萬々一右評議御座候ハ、御意之通り名人げいにもみけし夫にても承知不仕候ハ、外の儀と違ひ君臣の大□□□拘り候儀ゆへ拙者在役中ハ一切不同心の旨存切申のべ候外無御座候

一政府不正私欲等之儀委細筆記可仕旨奉畏是迄愚臣丈にハ書留置候へ共第一不記臆且又閱可申と念を入一覽仕候へハ品に寄疑心を受又ハ大事

小事の見わけ行届不申候間肝要の事脱落仕り不用の事留記仕り格別の御用にも相立申間敷と毎度心配仕候

一三千之儀申上候處成否ハ何とも御分り被遊兼候へ共何レ云々 御下知可被遊旨難有仕合奉存候乍然鈴伊云々申候ハ、やはり同意仕り居江戸を被 仰出候ハ、無已ふりにて罷在候様 御下知之趣委細奉畏候

一御厩一條最早入
御内聽候半と奉存一ト通り申上候處 御書之趣にてハ未タ御承知不被遊御儀と奉存候間委細申上度候へ共入組候事にて急々書取兼候間内密竹木へ申合候右手が段々上言仕候事と奉存候乍恐右にて御承知被遊候様奉願候御意之通り玄落馬旨之儀何分相待候へ共小男ゆへ格別のけがも有御座間敷乍恐一笑仕候

一岩船之事も御厩之事も正とハ不被 思召候由御厩の事ハ不正ニ相違無御座候へ共岩船之事ハ愚臣も昨今之儀江戸の方正歟水戸の方正歟何れ

にも相分り不申候へ共五分／＼にてハ江戸の方へ付候方
兩君様御爲と見込候間去月廿九日極内々丹波守へ密書にて爰計の模様
委細相運ひ候へハ去ル六日返書も參り大悦之様子此上愚臣身分の儀ハ
引受世話いたし候程ニ申來候へ共右ハ私の儀かんじんの
兩君様御爲と申所ニ至候ハ此方にて存候程ニ無御座候間明九日返書
にハ愚臣丈の正論可申遣とも奉存候處折角少々くひ合候所にて直ニ分
れ合候ハ愚臣一人ハ宜候へ共惣體のつり合如何仕候もの歟と存返し
先き方々愚臣天流にハ無之哉杯申來候間此方々も又却る貴君こそ近來
天流之者専ら御したひ申候由杯せり込遣し申候扱丹波守書中ニ意味に
て相考候ニ鈴伊ハ
駒込様御嫌ひ被遊候へ共能登一同先々御取成申置候ともしらず敵ニ相
成候儀心外と申ス意味又
兩君様之方ハ大丈夫と餘程自まん之口氣も相見へ右旁にて相考候に乍

恐何と歟御工風被遊丹波守を御手ニ御付ケ被遊爰許鈴伊兩人之内一人
并ふるむしなの松一人御轉シニ罷成尙又兩若年寄一同ニ御轉ハ御六ケ
敷可有御座候へ共伊豆儀ハ病身所詮相勤り不申廉を以いん居被仰付右
跡へ織部再勤被 仰付其上にて鈴伊之内一人ハ落馬仕候へハ織部直ニ
乗馬順ニ相成居候間旁御都合もよろしく可有御座候鈴伊も片棒をなく
し又ふるむじなを失ひ候ハ、格別力よハリ可申哉と奉存候尤織部儀愚
臣儀ハ深く相心得不申近次郎程ニハ見ぬき不申候へ共御意ニ趣も有之
又有志共もほめ申候間よろしきにハ相違有之間敷存候乍去丹波守ハ好
み不申由ゆへ此處如何可有御座候哉外にハ同列ハ勿論若年寄へも入札
可仕人物至る少く扱々差支候事ニ御座候

一雜賀松軒儀近所にて折々愚臣宅へ參候へ共先達と違ひ愚臣御役成
後ハ格別の咄も無御座候處孫市儀御附にハ御座候へ共丹波守へハ半

隨身仕候様相見へ愚臣内々呈書等萬一孫市承知候へハ丹波守等へ相うつり左候あハ愚臣儀又丹波守等より疑念いたされ候様罷成候間何共乍恐彼ハ彼是ハ是と被 思召宜く御含み之程奉願候

一有志への通路奸家へハ之れ不申様心懸可申旨奉畏候處有志と申あハ是迄一切通路ハ不仕候たゞ最初ハ竹木へ夜中慥なるものを以往復仕候のみ幸ニ近所之儀にも御座候間是迄一切もれ不申候へ共尙更用心專一ニ申合候事に御座候丹波守へ文通之儀も誠右衛門へ相頼丹波守屋敷ハ爲登下し仕候間是又危キ事ハ有御座間敷存候種々篤く御傳授被爲在候付乍恐有體存分奉申上候條御序之節宜敷御申上頼入存候以上

八月八日夜

御 側 衆 中

本文之外御役成出仕日之模様此時ニ竹木へ申遣候間右手ハ大意御承

知被遊候半と文略仕候條是又宜可申上頼入存候以上

竹木ハたけきにて名のりの讀こゑに御座候□^{欠損}□兼あ御承知被遊候益御機嫌克恐悅相認候人も御座候へ共御機嫌坏之事ハ無候方却あ御敬ニ中り候様存候尤眼病之こと御書ニ御座候節ハ格別と存候

一一 藤田東湖書案

嘉永四年九月七日

辛亥九月七日夕

拜啓

玉章并要略御廻し申候例之通御順達可申候扱菊地の呈書今便返上御間ニ合兼候後便返上之振ニ碩へ申合候

一此度ハ青山にて明夕迄の由左様御承知可被下候

一碩呈ハ當り前之事のみ申上肝要ハム^なホヤ見聞録更ニしらぬ御ふりにて

岡田

藤田東湖書案 (嘉永四年九月)

三百七十五

御控へいよ、伺ニ相成候節會計吳用任等缺席御防き被遊候様申上候
 一 江南にて架を防き候も妙翠府にて頻りニ架を助け候も亦奇此處一ツの
 策略のありそいな事也如何
 一 吳要任ハヤイケタヅ明ムラフヤ扱又ツサマト等の術中ニ落入不ホロソ明フ扱も
 可然候へ共江南を下し候ハ一人ツ、もおしき旨呈ス
 一 會計ハ更ニ心當無之傾城とも存候處先々雲上へハ不呈候いづれまたま
 た伺ひニハ相成間敷候
 一 今朝迄ハお波なムホヤかたへ返書なし可怪是ハ政府なも右之事廿九ニ返書
 なきゆへお波も引な候哉いそき早々

七日

九尾の狐ハ如何にも御用心實ニ危く御座候○△近々なムホヤかた勝手向之
 事申上候半御帳元も九百の身上迄ハ中々と存候へ共國事と家事ニ苦候も
 不申候間 少しも助申度存候事

一二 藤田東湖書案

嘉永四年

辛亥

乍恐御訴訟奉申上候

水戸表御馬屋御仕法馬御停止之事

下賤之我々共

申上候ハ誠ニ恐多キ儀ニ御座候へ共水戸表御馬屋御仕法馬御貸出し之
 儀莫大の御益筋ニ相成候御儀とハ奉存候へ共御近領御百姓共ハ至極難
 澁仕候間是迄も度々村々申合御訴訟申上度奉存候へ共御領私領御知行
 所入交り急々申合も不相届第一御馬屋御司伊東豊次郎様御儀ハ御老中
 玄蕃頭様御身内に御威光殊の外御盛ニ被爲入馬口勞共ニ内悪人共右
 御威光をかり非道の振舞仕候へ共箸の折候程ニ儀も豊次郎様ハ玄蕃頭
 様へ御相談之上御内意ニ御取捌キニ相成候由ニ御座候間容易ニ御訴
 訟申上候ハ、如何なるうきめを見候も難計と小人共のかなしさ乍恐か

げにて御悪口申上ケ空く三四年相過候儀に御座候然ル處此度安部虎之介様御領上州新田郡細谷村百姓京五郎等を御馬屋方御役人大内忠衛門様に御召捕尙又御出役増田庄四郎様を御公儀様御手にて御召取り之儀誠以ひよんなる儀到來仕り御馬拜借之我々共一同誠ニ心配仕候仍之一同心願之趣乍恐逐一左ニ奉申上候

一御町方御役所様御仕法馬并御郡方御役所様御仕法馬の御儀ハ萬事の御扱乍恐誠ニ御別段ニ御近領一同難有奉存候處御馬屋方御役所様之儀ハ乍恐誠ニ御非道ニ似寄候儀多く御座候右ゆへ何共恐入候へ共御百姓共内々御噂申上候ハ御町御郡兩御役所様ハ人を御支配被遊候御役場ゆへ御仁惠之御了簡難有奉存候御馬屋御役所之儀ハ畜類計御扱被遊候ゆへ人をも畜生同様に御扱被成候扱と御噂申上候乍恐大内忠衛門様の如き御役人御出役に御村々の悪者計御手先ニ御遣ひ被成候ゆへ右之通法外の御噂申上候様相成候儀何共奉恐入候事

一忠右衛門様にハ此節

御上様ニ御吟味中之由奉承知候間御同人是迄御近領におゐて惡逆無道の振舞ハ委細不奉申上候事

一豊次郎様之御儀ハ是迄御威光を憚りかげにて計御噂申上候所此度不申上候ハ、乍恐此後ますく

御屋形様御名目も出可申奉存候間有體奉申上候様第一御同人御惡行ハ下賤之馬口勞共を御烏帽子ニ被遊奥通り被 仰付右馬口勞共御妾様と膝組にて萬事御相談申上御妾様ハ多分の金子御内々馬口勞へ御下ケ馬買出し被 仰付扱右金子にて買出し候駒御馬屋へ引來候節ハ豊次郎様御始メ御支配共一同御見分金三四兩位之駒と相見候分を豊次郎様御自身に是ハ五兩是ハ六兩ニ御買上ケ可然と御下知にて何れも高直ニ御買上ケニ相成御妾様の御乗合ニ無之分ハ御支配共御一同御衆評之通り至亦からく御買上ケニ相成候ゆへ馬口勞仲廣へハ自ら右御手くだ相響

キ以之外御悪口申上候御烏帽子の馬口勞共ハ眼前豊次郎様御金にて下直ニ買出し 御上の御金にて高直ニ御買上ケニ相成候儀を存居候ゆへ上を學ひ候下に不種々の不宜私慾を振舞候も道理と奉存候事

一 右御妾様を御下ケ之分ハ別御隠密の御分と相見候處其外豊次郎様御金ハ勿論廣瀬貞次郎様増田庄四郎様玄蕃頭様若殿様御金ニ莫大御馬屋御仕法金へ御組入に相成候由に御座候間右にも夫々御手くだ可有御座と下々にてハ御疑心申上候事

一 忠右衛門殿御事ハ豊次郎様貞次郎様御ひゐきに御馬屋出役御用被仰付候儀ハ諸人奉承知居候處此度安部様へ御引合御出來に付ハ乍恐豊次郎様貞次郎様にて元御用被 仰付候仁之事ゆへ御引受被遊御馬屋方御用出役にハ相違無之又悪行ハ悪行ニ可申付と御立派ニ阿部様ニ御挨拶ニ相成忠衛門様御召捕にて水戸表へ御引付被遊候御事と一同御噂罷出候處忠右衛門ハ出役にハ無之飛脚之者と歟御挨拶ニ相成候よし

然ル處前日水戸御馬屋方御役人様方大内忠右衛門様と認御用之御文通忠右衛門殿御自滿にて諸人へ御見被遊候處忠右衛門殿にハ京五郎等召捕之儀豊次郎様始少しも御察當も不被爲事忠右衛門様扱ニ御任せ被遊候振御文面慥に拜見仕候云々尤阿部様へ御挨拶之^不□□^明□□大ニ相違にして上州野州筋にて是迄ハ忠右衛門様を悪口仕候者も却而忠右衛門様へ身を持扱々伊東様ハ頼母しからぬ御仁に御座候御突中りか出來候時に成忠右衛門様を似せ役人に被成候ハ何事ぞ股引半てんにて家來を連兩懸を爲持先觸にて村々へ千鳥をかけ候飛脚がどこの國ニあるもの歟又拜借人身元を糺し連印を取裏印迄いたし候飛脚があるもの歟杯と内々口々に悪口仕候事

一 豊次郎様にて忠右衛門様を立派ニ御引請被遊候へハ波風なしに御治リニ可相成奉存候處右之通り似せ役人ニ被成忠右衛門様御夜ぬげと出來候ゆへ此度増田庄四郎様にも御出役ニ相成儀ニ御座候處似せ役人のし

はり候百姓共に御座候ハ、庄四郎様御着にて早速繩を爲解御懇ニ當人へも御申さとし阿部様之御役人へも庄四郎様御足を御はこひ御申譯可有御座候と奉存候處庄四郎様御出役に亦やはり京五郎等ハ其儘ニ差置其上御吟味迄被遊尙又別段外村へ御預ケかへニ相成安部様御領の役人御呼出しに亦御引渡之御振合に御座候間諸人疑心も起り此度の出役も又似せ役歟と申ふらし候事に御座候其上庄四郎様と違ひ宜御座候處御添役服も殊之外ニ御不人物大小の帶し方其外身振甚不宜旅宿屋へ着候節も刀を先へぬき候跡にて脇指を御ぬき被成候様なる御仁に御座候御公儀様にても忠右衛門様御同様の御仁と御見通し相成ひよん事ニ相成一同奉恐入候事

一 廣瀬貞次郎様にハ忠右衛門御近縁村々にても是迄内々御惡口ハ仕候へ共此度御出役に亦御人體拜見仕候へハ天晴の御役村役人共へ御懸合向等も御別段に御座候處如何なる御次第ニ御座候哉伊藤様御意ニ不叶俄

ニ御召返しニ相成御上様へハ御亂心の御申立ニ相成候由庄四郎様御一條ニ付ハ尙又忠右衛門様一人へ御あびせも不相成と被思召此度ハ貞次郎様へ御あびせ被成候御たくらみと馬口勞共迄御惡口申上候事

一 庄四郎様

御公儀様御手ニ御懸り被成候一同御召捕ニ相成候者之内豊次郎様御意ニ入候者ハ最早御免ニ相成候村々へ御差出しニ相成候儀あまり御ひるき之儀と奉存候事

右之件々恐入候へ共何れも有體申上候此節御馬屋方御用相勤之者ハ承候へハ伊藤様に亦ハ専ら御内濟之御含ニ被爲入玄蕃頭様御扱も御座候御事ゆへ早速御内濟も御整ニ可相成との儀又

御公儀様之御手筋御内聞仕候へハ安部家へも引張御呼出ニ相成候儀内濟ハ出來ぬ事と被仰候由我々共忤にて相分り候事に無御座候へ共我々共奉願候意味ハ此上たとひ御内濟ニ相成候共御馬や方御貸出し候馬

之方ハ乍恐御停止被 仰出候様致度偏ニ奉願候左も無御座候へハ〇以下
下開

一三 藤田東湖書案

嘉永四年或ハ五年カ

壬子カ
辛亥九月十七日

遠來御書返上

五より八藏への一封無相違拜見仕候委細御答申上候處今日ハ長倉一件
に付てん印參り此事追テ可申上候へ共勞にハ不相成候 對談中ゆへ大ニ延引尊書拜見仕候へ
ハ晚景ニ相成候間文略仕候

一吉々御返書妙々々今晚ハ一盃のみすぎ可申奉存候

一右御返書も妙々しかし兩君ハ和ぼく等之處ハ先々御控へ被成却て俗ニ
朝様とハ代り合ハ御心配位の處にてごたすた被成候方と奉存候當時の
つり合にてハたとひ吉印直ニ 尊君を南方へ引候積にても又左様に不

相成事と奉存候間やはり吉印の風次第ニ御なびき被成候方と奉存候

一昨十六日夜着の

玉章ニ返すくも雜賀へもらし候ハ後悔しかし神兵と申事ハゆめにも
不申候間萬々一大かぶせニかけられ候とも神兵ハじじやくと控へ居候
様にとの御事に御座候

一十三日ハ又々御目見此前の御人數なり雜印ハ實母方忌中歟にて出不申
候此度ハ吉も奥の人へ杯ハさし不申候よし是等もさいかひひき候事
と相見申候其外別條無御座候

一吉へ御返書中大誠の事ハ草稿之處右ハ御用人市川跡へハ大誠可然と近
々御下知の

思召ゆへ御草稿以の外不宜御座候

大誠のつぎハ小山田夫も出來不申候ハ、江戸々勝五郎下し可然との御
ふくみと昨夜御内々拜見仕候勝五郎跡ハ加治左司馬近藤みき岡部城の御ふくみ左馬ハ表向かん内心て人也

一 勘定奉行白石ハ以之外尾羽と伺候ハ、其節郡の方跡役次第御ゆるしも可被遊歟の御ふくみ郡ハ村田理助横山縫殿若し六ヶ敷候ハ、小原忠次郎の御ふくみにて御座候しかし兼々貴書之通り□□○此所符合の如き漫書ありのむき安心不仕候

一 結城の論延引恐入候近々認置封し八藏迄廻し置可申候

一 御目付方大もめ松平引込御承知と奉存候松原飯田正論ハ元々御座候近來遠山の次第加治金三郎と申者正論ニ相成七日計以前引込申候赤子の頼みを受申出ぬと云ふ馬鹿な事があるもの歟といふ論のよし萬一七八郎御問返し有之候ハ、夫迄ニハ委細可申上候

但加治金ハ正論ハ此度計あてニハ相成不申候

一天野跡ハ白石と御おしはりの思召ニ御座候 是ハ伺候迄ハ更ニしらぬ御かほ勿論

一四 藤田東湖書案

嘉永五年二月廿七日

原朱

壬子二月廿七日

別紙申進候本文之意味愚老の申候通りにてハあまり役人共不相濟儀に候處愚老申候程ニハ有之間敷と御疑惑も可有之候へ共兼々申進候通り役人共は

公邊辰年の嚴命のみ相守り申酉以來の 恩命ハ内實難有とハ不奉存既ニ此度丹波へ申含候ケ條は右

公邊の御恩命ニ齟齬不致儀を第一に相認候處政府一同右
公邊の御達振忘却いたし留記等相探り候へ共一切不相分儀ニ水戸政府へ相運ひ候處水戸政府にも致紛失候哉不相分鈴木石見事ハ右様之事毎度筆記いたし候間石見へ問合可申候哉に候へ共最早外轉いたし候者の事ゆへ問合候も如何敷扱々と一同差支居候由近頃江水政府之内ニハ父子一和を實ニ願居候者も有之右之者共より内密承候事に相違無之候申の六月

并酉三月の

御沙汰ハ家中心ある者ハ三尺の童子といへどもそらニ覺居候程ニ難有奉
存尙又酉七月愚老へ御内諭之趣も愚老ハ慥ニ筆記いたし置候處政府にて
ハ右様御書付さへ紛失いたし留記にも不致候にて父子離間を好み候と一
和を好み候との異同御洞察可有之候扱又愚息側役ニ久世十太夫と申者有
之右ハ御同列久世氏の庶流にて委細御承知ニ可有之處先年愚老部屋付之
節近習をも相勤候ものにて悪心ハ差而無之候へ共一體伶俐なる性質にて
世風につれ候人物に候間役人にて離間を好み候へハ其風にも相成又一和
を好み候へハ必右風ニも相成候半此節ハ役人の勢力強く候ゆへ役人方ニ
相成居様相見候此段ハ全く久世氏御心得ニ御傳聲ニいたし度候也

此間中愚息より遣し候書面ハ皆奸人共の草案と存候間愚老も試ニ嚴敷申
遣候事も有之候處父子義絶ニ相成とも役人共差支無之様子ニ相見へ愚老

も驚き入申候父子の天性ハ勿論に候間此上たとひ離間の説ますく行ハ
れ愚息方々義絶之儀申來候迎も愚老ハ幾重ニも教諭いたし候含みに候處
役人方にてハ愚老父子義絶に相成迎も深く懸念不致候様子夫ゆへ愚老
より嚴重申遣候へハ例の短慮剛情なと噂いたし又ゆるやかニ申遣候へハ
右へ乗候る何事も相談不致蔑如いたし候姿ニ相成扱々術計盡果申候

一五 藤田東湖書案（推）嘉永五年

拜見仕候

鹿島明神たくせん御内々御廻し貴諭之趣委細承知仕候外の儀と違ひ御呈
書之儀ハ重キ御廉に御座候間御内談無御座候とも決而彼是申上候筋無御
座候間乍憚此段右等之御心配ハ御無用被成下候様奉願候
一八歳云々右等之儀ハ學者之くせに御座候別而同人ハ少々ですつばきに
御座候間乍憚以後共御用心可被下候左様申候迎少しも悪心等ハ無御座

候只學者風がぬけ不申學者の學者くさきハみそのみそくさきに譬へ候
る眞の學者ハ用ひ不申事に御座候

扱兩でん之事いろく同志中々にもつくにいたし候様子にて是迄も少
しハ耳ニ入候事も御座候へども野生儀自分の事を自分より申候事大き
らひゆへ是迄ハ存分不申上候處今日ハ眼前 神託も御示しニ相成候ゆ
へ不得已大意のみ申上候

一いん居ハころし候代りにて再び世に出さぬ爲のいん居に御座候尤紀
州杯ニ山中筑後守杯例ハ有之候へ共於

御家ハ御例無之たゞ栗田野航ヤコウと申山ものいん居之上又々御勝手へ携り
大坂へ登り候事も有之候へ共惡例にて御座候左候へハ御家に於て御例
無之儀況んや兩人儀ハ

公邊々云々之儀に御座候へハ何の面白有之再びかたぎぬ杯かけ可申
哉

夫を又々かたぎぬ杯引かけ候様なるつたなき心生し候ハ、乍憚四十七
年の大言皆虚言と相成申候右ハ今更申候事にハ無之去ル辰の五月六日
老公にハ御退隱被遊兩人ハいまだ無事之時御前へ愚一人被爲召其方共
ハ如何可相成との御尋ゆへ

上の御ふり合ニ准し候へハ切腹にも可有御座萬々一御仁恵に候ハ、蟄
居ハのがれ申間敷と申上候へハいやさうでもあるまい萬一更ニ何とも
なければどうする積りじやとの御尋ゆへ十が十御答メ可有之萬々一御
答メ無之逆も何面白ニ世の中ニ可能在哉いづれ此さかやきハ乍恐再ひ
すり不申覺悟のよし申上相退キ詰所へ相引候へハ天野申聞候ハ少々身
分の事に付調有之候間御用部屋へ參居候様申聞に付御用部屋へ客人ニ
於相成居候へハ此時實ニ苦心ハ此人計之近藤次郎曰扱此御大變如何と
申候間小子ハ只今御前にてもク様申上最早如何様被 仰付候ともせい
くといたし罷在候旨申聞候へキ近藤ハ今以覺居候半尙又一昨年吉成

又衛門御免之上初逢候節相互ひニ約束仕り此上如何程世の中直り候
迎も御同様いん居之身分再ひまごつき候様なる鄙劣ハいたすまじきと
約束尤萬々一

公邊の御政事直り天下への御申譯の爲

公邊を發し候ハ、格別夫ハとてもなき事なれハ御同様決心ハ動し申
間敷と迄約束右ハ最早古人ニ相成候へハ旁野生心ハ鐵石同様ニかたま
り居申候萬事右にて心底ハ御察可被下候左様申候迎も世の中を捨候所
存ハ更ニ無之却あいん印にてひそかニ力を盡し候方何程歟國家の御爲
ニ相成申候なまじむものほしそうにふら／＼出來候ハ、何にも成不申
候

一役柄云々右ハ何共大言の様に候へ共役祿共ニよろしき程人情よろしき
事ハ無御座候へ共東湖居士此まゝニ罷在候迎も格別天下への直段ハ下
り申間敷少しの御格式ハ上下町中計夫も俗人計にて御座候歟聊頓着不

仕事にて御座候

一老母今年七十二歳今年にも安心不仕朝夕の嘆キを見候へハ是ハ實ニむ
ねをいたため申候へハたとひ五人ふちにて七人ふちにて此まゝ罪人
の名を免れ相果候も深更ニ取仕抹の廉をのかれ候へハ母への孝道ニ
可相成奉存候扱又誰も欲心ハ有之候間此上世の有志追々復祿にも相成
候節ハ子孫へ御仁惠御座候ハ、本意無此上一身におゐてハふつと覺悟
をきハめ居候事に御座候

一右ハ一寸申上候ハけんたいとの被 思召候へ共實ニ決而御爲ニ不相
成候なまじむ之事をいたし候へハたゞ／＼結。吉。野。等。再。勤。の。例。を。開。キ。候
のみに御座候夫にハ乍憚

威公以來御例無之儀ハたとひ被 仰付候共御受不申上と腹をすへ居候
へハ自ら結等もやけとまり候わけにてせめてもの御奉公ニ御座候委細
ニ相認度候處いかにも手元くらく相成大亂筆草々申上殘候已上

十三日夕

第一の事跡ニ相成申候神たく早速相届候處委細奉畏候御請之儀ハ追
可申上との事に御座候此段申上奉り候と石河を呈させ候筈に御座候御
安心可被下候
神たく并いの書返上以上

一六 藤田東湖書案

嘉永六年閏七月

牧閣へ御書案

昨夜^{タカ}ハ芳諭之趣披誦殘暑御凌珍重々々抑長崎船ノ一條御いそぎのよしゆ
へ別紙類昨夜不殘見拔候間御城へ付候もの出仕前と存別紙二々七通先々
返進いたし候外ニ御達案四通少々愚意有之間後刻迄ニ付札いたし御廻可
申也

閏月十四日

水 隱 居

備 州 殿

先日^カの眼病ニテ漸認申候よろしく御推覽可給候

牧 野 備 中 守

一翰奉呈候俄ニ涼氣相成候御眼氣如何被爲入候哉不調之氣こう折かく御
加様被爲在候様專要御座候
然ハ此間奉伺候長崎表ニ蒸氣船御製造等之儀毎々御沙汰之趣奉拜承候
乍憚御尤之御儀同列共并海防懸へも拜見爲仕候處一同聊存寄も無御座候
右御沙汰之通早速長崎奉行へ相達候扱又阿蘭之異船を差出候別段風說書
一冊并ニ同國を此度渡來仕候蒸氣船風說書一冊其外加比丹より差出候封
書等四冊右ニ添水野筑後守を之書付一通同人を獻度物并贈物等之儀付伺
書付海防掛へ評議可爲仕候處別紙之通申聞候間評議之通差調仕候右書付

二通一括共一同奉差上候御覽相濟次第御返却被下候様奉願候伊勢守不快にて引居候付私々差上候様申こし候間奉差上候
右々如申上度如此御座候已上

閏七月廿三日

閏月廿四日

御留もの

昨夕之華墨披閱俄ニ冷涼愈無御障精勤被致并賀此事ニ候蘭夷別段風聞等御廻し候分遂一寓目不殘返壁いたし候兼御同様推察の通り暎夷も來年渡來之よし來年と申おも例之洋曆にてハ當十一月後ハ來年ニ屬し候ハ此節より百日計に候枝葉の事ハ兎も角眼目の處ハ兼御治定無之候ハ、乍恐御國威地を掃候事ニ成行候半と致過憂候諸賢の御評論承知いたし度候眼氣御尋問之處此節快方にハ候へ共燈下把筆六ヶ敷亂筆如此候也

閏月令四夜

二白墨夷へ爲御濟ニ相成候程の事ハ蘭夷へ爲御濟ニ可相成候旨長崎奉行へ御達の書付専ら世間ニ流布いたし候眞偽如何御序ニ御申聞にいたし度候不一

一七 藤田東湖書案

嘉永六年八月十二日

別紙大號令草稿宥々熟覽候處今度登營後始々如此痛快の義奉承知國家之福不過之存候委曲無所殘候へ共萬人目を拭る待居候砌ゆへ念ニ念入候脱カを方と存し少々懸昏朱書等いたし候

諸説紛々と申候ハ國持始メ面白く存間敷候歟

願之趣至極平和穩當云々至極の字目立候歟

右以下御草案之通りにてハ全く御新政の御砌御舊法被爲替候儀御痛

心の様ニ相聞へ他日大船御免等すべて御改政へ突中り可申歟且又彼理が添書を見てハ憤る人有之少しハ其意味も加へ度又交易の利益世俗にてハ更ニ不心得邪宗門御制禁もふるく相成人々ゆるかせニ心得蘭學者杯ハ別ちゆるみ居候間旁少々愚存相認及御相談候

○今般願之趣ハ容易ニ御聞濟不被遊云々容易の二字姑息家ハ喜び可申候へ共夫丈正氣を折キ可申歟此號令出候上ハ所詮交易ハ思召切之外無之候へハやハリ斷然と御趣意相分り人心一定いたし候方何々の御武備と奉存候乍去懸紙一切の二字あまり烈敷候ハ、何等杯歟

○尤當時云々是にて次第無之候へ共強キ事ハ
思召を發し弱キ事ハ衆議を御用ひの廉ニ相成候方御響キ合よろしく候間此處へハ面々云々を添申度候歟

○如何にも平穩ニ夫々云々あまり念入候様ニ候間一と通りにて可然歟
○其節至候てハ無據儀此三字困窮いたし候様相見候

○御末文實ニ感服云々更ニ異論無之

右號令一日も早く表發ニ致度萬一洩候ハ遺憾に候間もし急々表發六ヶ敷候ハ、先々御同列のみにて御秘し二三日前に差懸り其筋へハ御懸可然歟外之事と違軍務ハ非常事ゆへ此御砌惣登城被命乍□□中云々の譯合演述ニて表發候ハ、一段の正氣相認可申歟

八月十二日燈下拜

一八 藤田東湖書案

嘉永六年十一月四日

原朱
濟

一昨日拜見の御書類不殘返上致候御落手可給候

文政八年打拂の號令今より見候へハ無謀御手荒危き様に候へ共外夷よせ付ケ候へハ種々様々の我まゝ申つものり其上何事にて候歟公事を仕出し非を理ニ申成候彼等のくせ御座候始終ハ打拂之御手段無御座候夫ニ

付此ありさま如何成行可申哉扱々衰世是非もなき御事ニ御座候此上萬々一彼か申通りニ被遊候ハ、終ニ打拂候事も出来兼一戦もなく奪れ候様可相成候

十一月四日

海防

御用懸共

原朱
濟

長崎奉行一人歸府之儀はいかさま際限も無之候間伺之通にて可然候へ共筒井等崎陽へ着次第兩地の事情打合せ候上歸府可然歟
萬一魯夷浦賀へ來候ハ、魯夷への懸合ハ此度歸府の長崎奉行へ御申付爲懸合候杯も可然歟

一九 藤田東湖書案

(推)嘉永六年カ

魯夷へ御返翰案過日御相談申候通り古賀にて添削出來候分尙又再閲いたし候處

祖宗の字面二ヶ所何れも上へ引上ヶ認候而可然歟魯夷の書にも自分之事引上ヶ認候分數ヶ所相見へ申候もし又

祖宗二ヶ所の内一ヶ所ハ 我邦杯と改め候而も可然哉

一誠不能取古例律今事と申ス九字彼にて口實といたし候も難計候ゆへ削り候而ハ如何

一未又胡越之觀と申ス事面白くハ候へ共何と歟外の字面に取かへ薄情にハ取扱不申と申事さへ分候ハ、可然歟と存候例之通不案内見込違ひ可有之尙よろしく御勘考に致度候事

二〇 藤田東湖書案

嘉永六年暮

原朱
癸丑之暮大號令之儀閣老へ御書案

藤田東湖書案 (嘉永六年)

大號令表發之有無之評議別冊逐一熟覽いたし尙又得と勘辨之上愚意左
ニ及御相談候

一 大目附御目附ハ丸ニ同意

一 懸り御目附も同斷且文儀折衷之趣尤に御座候間其通り御改め可然候

一 深谷一人別ニ申出候處右書面之内ニ萬々一先方ハ不法働候節ハ申迄無
之打拂勿論後難有之候とも其節ニ臨み候ハ實ニ無是非場合云々と有
之上ハやはり御草案と同じ意味に相見へ申候

一 筒井も本文申出ハ同意にて別段書取ハ種々懸念之儀相見へ老練之思慮
左も可有之候へ共末文に至候ハは號令ハ御書案之趣ニ被 仰出候とも
御處置之處ハ平穩之御扱有之上にも彼ハ及不法候ハ、其節ハ死力を
盡し候儀勿論と有之上ハ是又號令と同意ニ相見へ申候

一 右之通り同意又ハ少々見込違ひ候もつまり同意に相見へ第一各方に
ハ月八中ハ粗御評決にも相成居候儀ゆへ

尊慮御伺御表發にて可然哉にハ候へども三奉行并懸り石河始メ江川等
ハ先々御見合之方と申出大切の御評議落合不申ハ御模通り不宜候間
三奉行等へ今一應御懸之方に可有之哉

一 評議申迄ハ無之候得ども御武備の根本ハ人氣一定いたし候より大なる
ハ有之間敷三奉行始メ號令一先ツ御見合と申も畢竟ハ其内に御武備御
整萬全の見込と相見候へ共交易御許容の有無相分り不申候ハ人心一
定不致浮説流言のみ行ハれ第一の御弱みと存候號令出候ハ、町人共ハ
來年戦始り候と存離散可致との懸念も一通りハ尤ニ候へ共是迄あまり
繁華ニ過候段ハ心ある者相嘆き候事ゆへ遊手浮食の減候儀實ハ苦勞ニ
相成間敷近來異船渡來の模様實に不容易如何様の大變に成行候も難計
候間四民共萬一の覺悟を究め候ハ可然御時節來年は戦無之と見越平氣
ニてうかり渡世致居候ハ此上もなく危き事に候間却テ號令にて人々の
覺悟爲究度事にハ無之哉かく申候ハ人氣騒々敷を好候様に候へ共決

して左様には無之無智の町人共ハ

上の御仕向ケ次第に候處全く當座の無事平穩のみ専らニ被遊來年萬一の變難に臨み老若婦女等道路ニさまよひ惡徒横行見す／＼萬人の生命を爲失候方御仁政ニ可有之哉又此節少々騒々敷様にて來年の御手配り御下知ニ相成町人共も老若の片付方等兼心懸町々取締方御行届ニ相成萬一之儀有之候も格別の混亂ニ不至異賊防禦専らに被遊候方御仁政ニ可有之哉利害得失分明之事と愚拙ハ存候

扱又此上おろしやの國境定め候節熟談不致ハ相成間敷との儀是ハ通信通商トハ事柄相違ゆヘ何分熟談界を御定めニ相成候も此度の號令ニ觸候儀ハ有之間敷又表裏の御扱不宜と申も外國ヘハ交易御免可被遊と申述御國ヘハ御免無之と被 仰出候ハ、表裏に候ヘ共外國ヘハ御免トハ不被 仰出只戰期御延被遊候爲ニ御斷り無之 御國內ヘハ御内實御打明ケ被遊候儀内外親疎の御手順左様可有之筈之儀と存候然ル處外國

の氣を弛め候が爲ニ御國內の人氣迄御弛めハ以外御不策と存候既ニ今度おろしや人上陸之儀於長崎願出候節右ハ嚴禁之儀何れ之土地たり共猥ニ上陸候ヘハ打拂候ハ勿論或ハ切捨搦捕候御時宜次第嚴重取計可申旨兼而國中ヘ御達ニ相成居候故其場所限如何御取計可申も難計其段ハ兼而相心得可申旨おろしや人ヘ申達候由當九月中大澤水野の申出ニ相見右之通りおろしや人ヘ迄慥ニ申達置候程之儀ゆヘ御國の人ヘ御達ニ相成候ハ當然之儀ニハ無之哉可然面々評議の通り此方々容易ニ御手荒ニ被成兵端を引出候ハ以之外不宜如何様にも平和穩當ニ御申諭し一年ツレも戰期を延候御扱ハ兼々御相談之通り勿論と存候扱如何程穩當ニ扱候も彼々不法狼籍に及候節ハ御草案之通り心得候外有之間敷候間三奉行等評議落合候ハ、差急御伺表發にいたし度尤右號令表發のみにて其實無之ハ不相濟候間實用の御武備何分御世話江川申出にも有之通り硝石大砲等精々御用意有之可然哉一體近來異人とも横行いたし候

畢竟乍恐御國威相衰候ゆへニ有之候間平和無事にのみ流れ候へハ異賊共ますく付込際限も無之扱又表向平穩ニ爲取計候も詰る所彼々及不法候へバ一統覺悟の氣合有之候へハ異人共も存外横行も不致勢と存候されバ

合衆國始メ同盟の國々不殘申合必定渡來可致杯と申ハ見こし如何にハ無智の民おぢけをつけ以之外不宜儀ト存候乍去武家の腹はたとひ數百艘押來候とも聊驚かざる覺悟專一歟と存候愚論長文ニのみ相成候ゆへ閣筆候尙宜敷御勘辨にいたし度候也

二一 藤田東湖書案

嘉永六年

急務と存候ケ條

- 一品川邊々洲崎邊迄夫々當年ニ内砲と持場を定め申度事
- 一關八州無頼の百姓浪人等夫々締りを付名前等しらべ萬一之節ハ何の手

へ屬し相働キ候様前廣に御世話有之候ハ、内亂の骨を御ぬき且ハ一廉の御用ニ相立可申事

但本文取調候ハ人才御撰み尤肝要たるべき事

- 一御府内諸浪人を始メ仕事師車力其外も前件同様取調萬一之節御用ニ相立可申事

但是ハ町方調にて辨し可申候へ共是以與力等人才相撰取しらべ申度事

- 一兩御番の訓練如何様なる事をいたし候歟不存候へ共迎も御訓練被成候ならハ御先手等取ませ訓練且又兩御番も敵間つまり候迄ハ空く槍を持て待居候もあまり無術歟と存候事

但是ハ兩御番訓練ニ不拘都御軍制御改正肝要たるべき歟

- 一弓ハ神國の重器に候間不殘廢候ハ如何に候へ共同心等小給にてハ所詮實用の稽古ハ出來不申候ゆへ右ハ不殘鐵砲ニ御改扱御旗本の内射術專

門の精兵を御撰み何百人と歟數を限り射手被 仰付可然哉の事
一 寄合小普請へ賜り候祿百萬石ニ踰候よし虚實ハ不存候へ共右様にてハ
何程

公邊御分限にてもあまりの冗兵と存候何と歟御使ひ道有之間敷哉之事
一 海邊へ武學校御建御旗本子弟右へ相詰事なきは劔槍銃砲を習ひ事ある
時ハ直ニ血戰心懸度事

一 伺事を被遊候にも御勝手へ拘り乍憚埒明不申其内ニ年月のミ立今日に
も夷賊渡來候へハ又々當夏同様狼狽いたし候ハ差見へ御同様實ニ恐入
候事に候御勝手の方ハ不存候へ共かゝる大難の御場合に候間國主領主
へ御任せ銀山爲御堀御年限を以夥しく通用銀御吹立有之度事

但是迄ニ通り銀山へ

公邊ハ御手入候ハ大名も費を恐レ爲堀申間敷又銀座の舊幣も悉
く御改正勿論と存候

右件々此間中登

城延引にて愚考ニ趣何分御存分ニ御評議ニいたし度極晩ハ諸方混雜早
春ハ御式等御事多ニ候へハ一日も早く御論定相祈候也

二二 藤田東湖書案

嘉永六年

長崎奉行ハ加比丹へ別段可相咄趣

おろしや國の使節名可本國の命を受遠路の海上渡來太儀千萬に候此國の
法を守り當所へ渡來の旨委細拙者へ書翰の趣神妙の事に候別に老中への
書翰持參いたし候由に當職への書翰相許早便を以官部へ申立候處本文
の通り可申渡旨申來候右様申渡候わけハ當夏

公方様御不例にハ一統心配の砌亞墨利加船浦賀表へ渡來書翰差上度旨願
出候付無餘義筋も有之付出格のわけを以右書翰爲差出候處本書ハ先ツ平
穩に候へ共使節添翰ニ内ニ如何敷文儀有之此國かたぎの勇士ども以之外

憤り再び渡來もいたし候ハ、此方々事をも起すべき風情に有之候然ル處
人氣殊々外あら立居候

公方様御容體次第ニ被爲重遂ニ薨去被遊

右大將様にハ 御喪中ニ被爲在右ニ付ハ

御代替り御規式等萬端御事多に付一二年の間ハ亞墨利加書翰之趣及挨拶
兼候旨其方を以加比丹の事 亞墨利加へ可及通達と内評一決いたし既ニ同役水

野筑後守へ指圖相濟候折柄おろしや船渡來の處おろしや之儀ハ先年使節

へ申諭候趣を用ひ其後渡來も不致此度も此國の法を守り當所長崎の事へ渡來

いたし申立振も平穩ニ付旁神州之事ニ付右様御事多の中ニハ候へ共別段

のわけを以書翰受取候様可然前文の通り人氣あら立居殊ニ

御大喪御代替の節急務をさしおかれ外國を書翰の趣評議いたし候ハ不順

の筋ゆへ御挨拶の有無先書翰受取置候て御挨拶の儀ハ追々加比丹を可及

通達尤おろしやの儀ハ數十年以前を願有之渡來之節斷り置候事に候間右

以前ニ亞墨利加へ及挨拶候節ハおろしやハ必何レ共及挨拶候にて可有之
候間かへり候處引返候へハおろしや使節へ相咄候様被下候

二三 藤田東湖書案

嘉永六年

(原朱書加筆以下括弧内同然)

此度亞墨利加合衆國を差出候書翰二冊相達候付願出候(△交易之儀も一

切難被及御沙汰尊慮之旨)ケ條御届有無其利害得失夫々被盡思慮被建議

候趣各途熟覽集議参考之上達 御聽候然ル所諸説紛々之内(同異ハ有之

候へ共)詰り和戰の二條ニ致歸宿可申前文願之趣何分平和穩當ニ申來有

之候得共(添翰之趣にてハ其心底本文之通計も不相聞願候趣御許容にも

相成候ハ邪宗門嚴重御制禁之廉ニ觸候のみならず國力衰弊人心感溺

の端を啓キ候筋に甚不容易事ニ被思召候祖家之御舊法を被爲守和親

ハ勿論(交易御許容之儀ハ始終如何様の儀出來可致哉と被思召候仍ハ

此節御初政之御砌 祖宗の御法を被爲替候儀ハ深御心配ニ 被思召候

付舊來の御制度を被爲守今般願候趣ハ容易ニ御聞濟不被遊候 思召之旨被 仰出候尤當時而々致建議通り近海を始御備向未御手薄之儀ニ付被申立置候書翰通り彌來年渡來いたし候共 御聞届之有無ハ不申聞可成丈此方ハ争端を開不申様平穩ニ爲取計候へ共萬々一彼方及亂妨之儀有之間敷とも難申其節ニ至候(最早御堪忍難被遊候間 御用捨難よし)ハ差圖次第無二念打拂闔國の力を盡し 御國威相立候様可致右に付何れも不覺悟有之候ハ 御國辱にも相成候儀ニ付必可及接戰心得を以防禦の御備相立士氣憤發勉勵いたし候様上意ニ候右之趣一同被奉承知萬一事起り候節ハ毫髪も 御國體を不汚様上下舉之心力を盡し忠勤可被相勵候事 右之趣萬石以上以下不洩様可被相觸候

二四 藤田東湖書案(推)嘉永六年十月廿七日

原朱書烈公加筆

「十月念七朱書ニて書添遣ヌ扣」

此節風説承候へハ九月中北方ニ來候異船ハおろしやニ相違無之と松前家來物語候ものも有之よし又唐太の内くしんこたんへ松前より出し置候番人右一條にてにげ返り候よしよく 實事ニ候ハ、かの奉使紀行にこれある通り唐太を乗取候積と相見候不届至極に候扱長崎へ來り懸合中右様之始末誠ニ可惡候處此度長崎にて御返簡迄相渡し候ニ右をさらにしらぬかほも如何敷候間御返簡の中へ

北方の堺不分明ニ付相定め度由申聞ハ有之候へ共元來我國と貴國ハ至之遠境ニ候處貴國航海術開け候以來漸々東南之方經略いたし候ゆへ自然隣國の様相成候往古へ立歸り論候へハかむさずかの地名も蝦夷の方言ニ有之からふとハ勿論蝦夷の屬島に候所近來らつこ島の北迄其國の人來り居からふと北方へも同斷のよしに候へ共蝦夷ハ地廣

く人少く北方を經略いたし候事も不行届其國を經略いたし候を見濟置候ゆへ先々は迄無事平穩に候へ共新ニ界を定め候と相成候へハ自然人氣を激し候も難計其上二千五百年來先例無之儀ゆへ急々ニハ取調間ニ合兼候間追ふ云々

と申氣味を加へ候も如何扱又彼國使節へ對談之後別段ニ口上にて當九月東國唐太地方ニ異國人上陸之由注進有之候處貴國ハ當地長崎へ使節被遣懸合中ニ事故北方へ上陸之分ハ決る貴國之船にハ有之間敷候へ共萬々一貴國の船に候ハ、當分ハともかくも後年ニ至り必境を定め候時の故障相成候間爲念斷り置候云々

の氣味ニくぎをさし候もハ如何

(一唐太の義何か騒動ニ聞え申候風聞よく御聞セ可然候)

海防懸り

藤田彪

二五 藤田東湖書案

安政元年正月十日

聚案
〔安政元年正月十日
安井仲平へ御書ヲ賜ヒシ件〕

以別紙申上候通過日愚臣同志之者へ遣候へと 御沙汰にて賜り候 御染筆伊東修理大夫家中安井仲平と申者儒者にて用人相勤追々へ頂戴爲仕候處實海防之儀上書仕候ものニ難有奉存日向國産のかし壹本のヤリ并大竹長貳尺五寸計廻リ一尺七八寸 獻呈仕度只今持參仕候先頃も信州のそば御下ケニ相成今以愚臣御預リニ相成居差支候間此度も返し可申奉存候へ共彼も有志の者殊ニかしも竹も別而重キ品にハ無御座折角の心にて持參仕候ゆへ先ッ御内慮相伺可申と申聞置候何れ出仕御目見之節可申上候へ共此段奉入 御内聽候只今松平土佐守家來參候由ニ付乍恐草々奉申上候御用捨日をば他所もの心得居今朝を引もきらす客來却る

御殿へ出候方も繁多にて差支候事に御座候乍序嘆息奉入御内聽候已上
正月十日

二六 藤田東湖書案

安政元年正月十六日

- 一 浦賀内外之御警衛肝要勿論に候へ共兼々申候通京大坂の御備無之候も
ハ如何にも寢席を不安候近畿大名へ御達振有之可然哉之事
- 一 御府内市中之鎮撫舊冬御先手へ被 仰付町奉行も夫々達候振御廻し
ニ相成致一覽候處市中ハ鳶の者頭々ハ達ニ相成手分致し都而其所々々
にて自分の持分を守り悪者等制布いたし老若病人等撫恤いたし候方行
届可申哉之事

但別紙類返上いたし候

- 一 諸品の價引上ケ候儀嚴敷御沙汰有之度事
- 一 御返簡今以御出来に不相成候哉之事

一 上方其外方の廻船異船渡來を承り萬一豆州總州沖等にて猶豫いたし居
候ハ、迎ひ舟さし出し異船ニ無構入津爲致度事

一米穀之事 縦令御損失ハ相見候共越後米等
關東ハ御引入之御工風あり度事

一 御門々々増上寺始メ海岸御備之事

一 異人へ應接振之事

一 兩御番大番新番其外御先手等萬一之節ハ何方へ相詰如何様の振ニ勤候
哉御懐合のきまり心得ニ承り置度事

以下烈公加筆
「右等の義ハ昨年夫々へ御懸ニ相成候様申候處今ニ出不申哉出居候ハ、心
得ニ拜見仕度未不出候ハ、御催促ニいたし度候也

正月十六日

水 隠 士

勢州殿御初へ

二七 藤田東湖書案

安政元年正月十七日

早半鐘も拍子木も五十歩百歩又武士屋敷にて賣鐵炮打つき候ハ尙如何のよし昨日御咄申候處左候ハ、工夫致し候様御申聞ニ候へ共夫ハ外ニよき處も無之扱ノ指支候處つらノ熟考いたし候に墨夷及狼藉候迎も何も御府内の町人等へ爲知候にハ及不申武家さへ心得候へハよろしき儀武家も差向き持場出候而血戦を心懸候者第一ニ承知いたし候而よろしき儀ゆへ兼而其廉をわけ置夷船滯留中ハ留居仲广申合聞番を付置く類又御小人黒鍛等を兼而ふれ場をきハめ置武家辻番々々へふれ辻番ハ一軒へふれ込候へハ隣家々々へ通候様の事にてハ如何兼而持場と勤振さへ御達ニ相成居候ハ、此節如何なる人にてハ耳立いたし候ゆへ速ニ行渡り可申歟町家も組合にて兼而聞番を立置候ハ可然候扱品川ハ芝邊永代近邊位迄ハ時宜ニ寄御焼拂ニ可相成候へハ立退の用意爲致候而宜候へ共其外ハ却而火之元盜賊を用心やハリ其宅々を守り候方可然候内海にて大砲を鳴し又ハ上陸及亂妨候共必高輪芝邊迄にて慶ニいたし

候間少しも不騒候様町家鎮撫之もの精々申聞火の元等嚴重ニ制布いたし可然候

一右之通にてハ何歟ひそノいたし武家の勇氣引立不申との論も候ハ、右早ふれの外ニ十人火消にて急の大鼓打候方可然歟左候ハ、其旨兼て町へ達し急の太鼓打候は武家出張の爲に候へハ町家にてハ彌以靜謐に心候様異船壹隻ニ三四百人乗組候迎も十艘ワづか三四千の人数海上ハ大筒等打候分にてハ遠方の町家迄ハ届き不申上陸いたし候ハ、幾萬の武家か新手を入かへノ三四千の異賊を慶にいたし候ゆへ一同安心いたし御用ニ拘り候品々ハ平常の通商買いたし候様くれノ申諭置度事候歟尙愈ノ良考も可有之承り申度候也

正月十七日

水 隱 士

勢州殿御初

二八 藤田東湖書案

安政元年正月十九日

長崎の別紙類一覽いたし候處魯夷ハ先ツ退帆ニ相成候へ共右之内いきり
す軍艦差向候風聞も有之且又おろしやもあめりかを丁寧ニ扱候へハお
ろしや憤り可申籠末ニ扱候ハ、あめりか承伏致間敷おろしやハ最初長崎
へ來候事ゆへ先ツ穩ニ出帆候へ共あめりかハ無法ニ浦賀へ來候事ゆへ容
易ニハ出帆致間敷乍去おろしや願さへ御取受無之上ハ此上あめりか如何
程ニ願候とも決而御取受にハ難相成此處能々考候へハ此度之事實ニ不容
易候處去年と違ひ世上わるく見こし候而人氣如何にも引立不申萬一彼よ
り俄ニ兵端を開キ候ハ、大ニ狼狽可致痛心いたし候仍而ハ長崎之事情あ
まり御秘し無之大意にも御書取尙又墨夷ハ兵端を開キ候ハ、云々之儀去
十一月號令よりも一段はげしく御觸ニいたし度事
一此度の異賊ハ平穩くと諸人申候へ共鎌倉英勝寺附屬之者一昨十七日
終日金澤にて一覽之様子にてハばつていら自由ニ乘廻しうたおうたひ

傍若無人の様子に候よし

一將官不快と申候而取合不申も可惡彼等先ツく此方の動靜を察し居候
事と存候

一急登 城の儀人傳ニふれ候のみにてハ届キ兼候旨御目附申合尤に存候
大鼓板木ハ可然候螺も品と吹手さへ差支無之候ハ、可然候もし又火術
家へ被仰付佃島揚火筒を處々へくばり置烽火爲御揚にてハ如何

但大鼓にても狼烟等にても右ハ

武家急登 城之合圖に候間町家にてハ驚き不申却而火の元等嚴
重心を付候様兼而御達之方と存候

大鼓之義御城御大鼓と聞違可申哉との御懸念も有之候へ共三ツ
ツ、たゞミ打候ハ、まぎれも致し申間敷候

一御目附ハ差出候御觸案の中ニ本文へハ老若登 城之上太鼓等の合圖と
有之

但書へハ急登 城無之内ハたとひ鼓聲等承候共動搖致間敷旨相見候處
太鼓等ハ合圖有之候ハ、老若最早登 城と諸人心得是ハ登 城無之内
の鼓聲と申儀ハ分り申間敷候へハ但し書有不用と存候
右ハ其筋へ御懸ニて早速御觸ニ相成居候方と存候昨日の御書類返進愚
存之趣相認候也

正月十九日 登城出仕前取急大
亂筆御推讀希候

水 隱 士

勢州 殿 御 初

二白應接迄の所ハ平穩ニ見セ候とも其後存意不達と存候ハ、如何程の
振舞致候も難計兼て御咄申候通り長崎へ來り候ハ表向平穩ニ禮義を以
願出浦賀へ來候ハ以威押付候申合と被察候へハ應接後ハ如何變候も難
計候へハ本文の御觸等ハ今日中ニも御決にて御觸ニ致度其他御備向等
御手拔無之様吳くも致度候事

二九 藤田東湖書案

安政元年正月廿三日

應接振之儀大學等手揃之上ハ彼是申ニ不及候へ共心付之廉先頃も認
御相談申候處其大筋尙又左ニ及御相談候過日の論と重複之事も可有
之候

一 應接の寛猛等臨機應變ゆへあらかしめ一定いたし難く候へ共魯夷ハ隣
境殊ニ長崎へ來候亦さへ願之趣延候上ハ何程墨夷ハ願候迎も即答いた
し候亦ハ魯夷へ對し信を失ひ候ゆへ此儀よく推察いたし候様
一 又候渡來候亦遠路空しく返し候ハ氣之毒ゆへ蘭人へわざと相頼み傳
達蘭人々も受書差出候處右約ニ違ひ即答いたし候亦ハ蘭人へ對候亦も
信を失ひ候間此儀も察し候様

一 我國貳千五百余年前例無之事を半年一年之内ニ挨拶承度との儀あまり
短氣なる事ニハ無之哉得と了簡いたし候様
一 去夏ハ

御病中去秋御大變此節

御代替之御大禮未被為濟

祖宗の大法を變候儀及評義候ハ人心決テ不服整ふべき事も不整候間
當寅年ハ巳年春迄三ヶ年之間ハ有無及挨拶兼候

一是非只今有無之挨拶承度との事ニ候ハ、

祖宗の大法通り斷り候外無之候へ共夫にてハ去夏以來折角の厚意にて
遙々渡來の廉ニ相當不致候間右申通り貳千五百餘年の法を變候事ゆへ
篤く評義日本國中承知之上有無之返答ニ及度候

一おろしや問答にも有之通封建郡縣の相違 神國人心固結のわけ等乍勿
論能々申諭度且他日交易整候ハ、此方ハ何々の品望にて其方ハ何々の
品遣候心得に候哉先キ承候分ハ不苦候間委細ニ承り候上得と評議い
たし可申と答候ハ、彼も期を待候心ニ可相成候

右の趣をやわらかに懸合先キ兵端を開キ兼退屈いたし候様仕向ケ

申度候兩度迄渡來之ものへ三五年抔とふらと懸合候ハ中々承知致
間敷候間はきと當年ハ三年と申候方可然三年にて御兵備不整候ハは
迎も御整六ヶ敷候右件々を應接の眼目といたし度々懸合候ハ物分
レニいたし其中ニ與力等心得正之氣てん有之ものへ申付遊説を入候
ハ可然譬へハ馬鹿くしく日々懸合にらみ居ハ本國并ニ外國への
面目ニ米穀食料にても頂戴にてハ如何ニ候歟説を入候ハ可然哉にも
候へ共表向應接之節此方ハ内かぶとを見せ候ハ以外とくれく愚慮
いたし候如何にも大切之儀諸賢の衆評如何

正月廿三日夜燈火
亂筆

水 隱 士

御推讀希候

勢州殿御初へ

三〇 藤田東湖書案

安政元年正月廿七日

謹る奉申上候あめりか書翰今朝半兵衛呼寄私宅に爲寫申候間本書相納
申候御寫ハ直ニ御預り申上候
一 はらじんぞうイシザテヅヨ書面乍恐内々奉入

高覽候

一廿二日彼理病氣見舞品物遣候節黒川嘉平の供ニ相成異船へ罷越候村越
芳太郎事櫻任藏昨夜對談いろく事情承候處第一可患ハ大學頭始メ御
使の心底如何にも疑敷御座候平穩々々を專一ニ仕候ゆへあしく仕候ハ
、御國體を汚し候儀何共安心不仕候五年ハ何事をも申のべさる代り五
年過候ハ、三ヶ年之間試ニ通商と懸合候ハ如何と林等内評いたし候
趣尤右ハ席上種々の論の内の一ツにて勿論決着ニハ無之事と存候へ共
扱々苦々敷御座候仍る愚察仕候に筒井川路等ハ出立之前日
前様へ 御目見仕候處此度は 前様くぎをさゝれ申候を恐れ御目見
も不仕彼地にて臨機應變と申事にて俄ニ御返翰を目論御斷りばなし位

にて決着の含みにハ有之間敷哉左候ハ閣老初メ不相濟事と存候全く
の推察にハ御座候へ共過憂之餘り奉入御内聽以上

正月廿七日

臣 彪

異船へ大こんねぎ遣候へハ異人共直ニ受取將官へ披露無之内ニ大こん
等をぬすミかじり候由無禮無作法實ニ禽獸同様のよし其上昨日云々と
懸合候事を今日ハ更にしらぬかほにて飛し候類言語同斷之由に御座候
以上

三一 藤田東湖書案

安政元年正月廿九日

正月念九

御留未濟

夜

濟

浦賀書類一覽いたし候所林家等痛心實以察入候いかさま實地にて引受候
身にてハかくも存候ハ畢竟

御爲を存候を起り候事にてゆめ／＼無理とハ不存候乍併彼が暴威に恐れ
通商をすまし候上魯夷暗夷佛夷迄も同斷と相成候ハ第一
御國體不相立乍恐

御當家の御威光も是迄と相成外夷ハ勿論國持の御仕置ニ拘り可申候長崎
の風聞爲承候ニ鍋島等不承知にて魯夷へハ更ニ祝筒タリ共爲打不申候由
然ル處何程大小名備手薄に候迎内海にて横行の振舞見濟候上ニ願之通爲
御濟にハ江戸の全力黒田鍋島にも劣り候譯にて扱々恐入候仍昨夜よ
り彼是と愚考候處浦賀にて懸合不届ニ御座候ハ、江戸へ參候と申節ハ金
川邊を引上ケ大師河原邊可然場ニ別ニ應接被 仰付候外有之間敷扱を
ハ何分やハらかにいたし願をハすまさず浦賀の懸合通りニいたし夫にて
承伏不致候ハ、此上ハ何と申候とも外ニ挨拶振無之と申拂彼を兵端を開
キ候ハ、不及是非候間可及接戰と御決定之外無之候歟仍ハ天下安危の
場合ゆへ先刻も申候通り明日にも愚息始メ大廊下大廣間國持へ覺悟之儀

ワさ／＼登

城被 仰付候上屹と御達し今日にも近海へ來候とも少しも騒かず迎船さ
し出し引上ケ應接の手配ニいたし置可然候

右ハ近海へ乗入候節の覺悟に候

扱林家へ早速御申遣誰ぞ被遣候も可然無人島等之事ハ一切御止其代り薪
の見通しにて石炭を長崎西國にのみ有之品ゆへ長崎ニ限り御渡候にて被下候儀ハ爲御濟にても
可然夫にて承伏不致候ハ、甚不好事にハ候へ共不得已候間當寅ハ三ケ年
之間申のべ巳年にハ此方より船を出し可然所にて尙又三ケ年之間試ニ交
易可致仍ハ此方にてハ此節を國中から出候ハよろしき品物等取調其方に
ても取調候様扱此方舟を出し候節ニ至候ハ蒸氣船等もこしらへ候ゆ
へ石炭も必用ゆへ遣し候儀ハ不相成候と懸引ニいたし石炭を長崎にて遣
候歟三年過候ハ尙又三年之間出候ハ試み交易歟二ツ之内一方にて承伏い
たし候様懸合可然候右にて承知不致候ハ、前書之通大師河原へ引上ケや

ハリ浦賀にて林家に懸合候通り懸合最早此外ニ是非と申候ハ、
祖宗の法にて一切斷外無之候と手拂ニいたし其所へ例の遊説を入れあぶ
もとらすはちもとらず兵端にのみ開キ候よりハ石炭歟此方ハ出張交易二
條之内にて承知の方可然と申諭候方可然石炭置場とも存候處無人島八丈
島にてさへ場所をかし候ハ不容易候間内地ハ尙更他日の故障に相成候ゆ
へ御救心にて石炭遣候方可然左候へハ魯夷への御返翰にも相當いたし可
申候

但いづれの道彼承伏不致候節ハ一同必死の覺悟并計策肝要ニ候

大師河原等すべて江戸海をさして乗入候節のかためと細川等回守國カ

可然候以下烈公加筆老眼燈下亂筆御推讀可給候也

正月念九夜

水 隱 士

勢州殿初へ

三二 藤田東湖書案（推）安政元年二月二日

春寒無障大悅櫻馬場礮製も半ニ不至候内墨夷渡來遺憾千萬何とぞ一挺ツ
、も早く御出來扱出來候分ハ直様臺車等全備いたし度同意至願ニ候扱ハ
中萬事決る疑無之者と被見扱候歟ニ相察候處本國を慕ひ歸り候程之者ゆ
へ感心にハ候へ共元來墨夷にて中萬が幼年を見込右一人のみ別る恩をき
せ筆算仕込候處ハ計策無之とも難申中萬も一命を被救候ニ幼年より廿歳
迄の恩義有之候へハ墨夷の不爲ニ成候事ハ決る好み申間敷仍るハたとひ
疑無と被見扱候とも彼船へ遣候儀ハ勿論上陸之節も爲逢候義ハ必見合せ
此方の内評義等ハ一切爲知不申方可然尤江川の用ひ様にて墨夷の事情等
よく分り却る彼を防ぎ候道具ニいたし候ハ江川の腹ニ有之べく如才ハ有
之間敷候へ共過憂の餘り如此候也

二月初二日

江 川 と の

二白實ハ此節がらはなしがひに致置候ハ不用心に候へ共窮くつニいたし候ホハ當人氣受をそんじ用ニ立不申候間御あてがひをハ存分ニ被下扱江川腹心の者へ内密被申付はなしがひの中ニ守護の意をふくみ可然候龍の子をなつけ飼置候もの大嵐ニ節風雲に乘し逃去候むかし咄の如く萬々一變心墨夷の船へ被連行候時ハ臍をかみても間に合不申候くれくも念ニ念を入候方可然候

三白墨夷應接ニ儀我ニ備無之ゆへ乍殘念平穩ニ返し度ハ同意候へ共平穩々々にて彼ニ被乗候へハ際限も無之歟彼ハ河伯と雷獸の如く水上と火器を待みかたの如く横行いたし候へ共野原ニころげ廻り候節ニ至候ホハ河伯雷獸も格別ニ事無之間艦礮備候迄我ハ陸地にて神速接戰の氣を待應接いたし度江川の勇氣必夷人の膽へひゞき可申と存候乍序例の剛情論申述候也不盡

三三 藤田東湖書案

安政元年二月二日

（甲寅）二月二日

一林等も引返し横濱にて應接ニ相成候由昨日御申聞之處石炭被下にて承服候へハ無此上不得已候ハ、三年の後此方ハ出張さる代り石炭ハ遣し不申儀委細過日申進候へ共林等あしく心得違ひ出張候ホ交易と申位ならハ内にて交易も格別の相違無之と存候萬々一内にて交易御試み杯と口すべり候ハ、不容易出張と内へ引入候にてハ同し交易にても雲泥の相違人氣并武備へも引張候事ゆへ申迄ハ無之候へ共此處能々御申遣しニいたし度爲念申進候

一横濱應接ニ上一切承伏不致候節の覺悟御同意肝要ニ候金澤沖にて動靜を見きハめ候上本牧ニ入候順にて考候へハ又羽田をも乗込候儀何共安心不致候此方にて其度々に一旦ハ驚き直ニ人氣怠り候間後にハ品川沖へ滯船にても油斷いたし候様成行可申此處實意ニ考候へハ扱々危き事

に候何分賢考有之度候

一墨夷渡來最早半月を過申候此上いつ迄滞船も難計候間大船大砲等之急務ハ右ニ無頓着果敢取申度追々諸大名の模様承候に大船を作り候も用ひ方不相分全海防の爲計にてハ失費を厭ひ引立不申向も有之由仍而大船出來候ハ、右にて參勤交代并米穀等運送もいたし候様且又小家ハ組合製造等之儀并内證交易の弊を防ぎ候爲メ出帆着岸の締り合等早速御評決被 仰出ニ致度候此度の如く大耻辱を忍ひ居も畢竟ハ大艦大砲無之ゆへのみに候へハ篤く御評議相祈候也

二月二日

水 隱 士

勢州殿 初へ

三四 藤田東湖書案

安政元年四月十四日

芳翰披誦いたし候愈御健勝并賀之至候扱ハ御辭職御内願等ハ以之外不宜

旨先頃申進候處やはり御辭表被差出候意味尙又厚き台命御黙止難被成御出勤ニ可相成次第縷々御書中委曲承知いたし候萬一長く御引籠にも候ハ、乍不及又々可申進存候處早速御出勤爲

國家雀躍いたし候右ニ付善後之策尙又京師炎上旁御痛心之旨御尤千萬實以御察申候乍然天明兩度の飢饉御代替間もなく
内裏炎上之處故樂翁在職文恭公を奉輔佐三家共へも御相談被有之寛政の御改正今ニ至る迄傳誦いたし候されば今日の禍を轉し他日の福と被成候も貴兄の御勉勵次第と存候間何分御努力寛政ハ勿論享保以前にも御挽回有之様日夜渴望いたし候也

四月十四日

水 隱 士

勢州殿 御始

二白京師炎上に付石河上京之支度いたし候由故弊邸近所ゆへ風聞承候處御同列中にてハ誰殿被登候哉必貴兄にハ此砌御膝元御離れ被成候ハ御

爲以之外不宜候萬々一右御模様も有之候ハ、早速内密御申聞にいたし度
乍不及建白いたし度候不盡

三五 藤田東湖書案

安政元年五月十九日

五月十九日

昨十七日御廻しニ相成候書類之内琉球唐太并細川へ御差圖三ヶ條返壁
いたし候

一琉球之事問答ニ御認御獻立ハ出來候へ共客人のすき嫌ひにより御臺所
人俄ニ取合せ候様にてハやハリ三月三日の姿ニ成行可申歟琉球東西へ
隨從之事情ハ墨夷委曲承知にて尋候に相違無之既ニ當正月上旬琉球へ
入津之節日本の屬國ニ候哉と琉人へ尋候節琉人日本の屬國ニハ無之清
國の屬國之と碇と答候歟之由右風説多分無相違相聞申候間薩州へ御懸
之上御判談可然候愚考ハやハリ情實をあからさまニ申候方と存候是も

獻立のミにて客人食ひ候哉否ハ難計候へ共試ニ申候に

琉球之儀ハ我慶長年中ハ松平薩摩守へ服従いたし代々無懈怠江戸へ
朝貢いたし候得共清國の正朔を奉し居候故表向琉球へ尋候ハ、清國
の屬國と申にて可有之候乍然琉球も二百數十年薩摩守の恩澤を受候
ゆへ永世薩摩へ背きハ致間敷夫ゆへ薩摩にても厚く撫恤いたし置候
事ニ候右様日本の屬國同様ニ相成居候段ハ世界萬國にても承知ニ可
有候處近來外國ニハ琉球の小國なるを侮り自儘ニ入津上陸外國の人
并品物等差置城中迄も立入候由定めて清國へハ斷り候上と相見候へ
共薩摩へ對し無禮之始末と立腹致候者も有之候へ共入津上陸の者共
自儘のみにハ亂妨狼藉の振舞ハ不相聞此方ハ爭端を開き候も無益ゆ
へ先ツ見濟聞濟置候旨追々薩摩守ハ申立有之候事

右位ニ應接いたし彼方にて甚しき事申懸候ハ、御獻立之通り右等の心
得に候ハ、難及挨拶旨申拂其方にて理不盡ニ奪候様不法有之候ハ、下

田箱館等の約定も破談ニ可相成意を含み可然候歟尙懸役々へ御懸之上御評議之事

一唐太一條織部等へ御達案之内境界の概要を申談候様にとの文儀を境界の概要を見分致候様と改め申度候此方にてハ見分のみと心得候亦も彼方にてハ必申談候半況や此方申談候ハ、必横濱應接の如く成行候半と存候魯夷長崎にて懸合中唐太へ上陸剩越年之義彼方にてハ外國の警固杯と理窟を付候とも詰り非文ハ彼ニ在候ゆへ始終此處を含み居度事ニ候

一細川への御差圖振如何にも平穩に過候へ共時勢不得止候歟應接懸りハ異人へ達振口上ハ幾重にも平穩可然候へ共搦捕引渡とのみにてハ實事之上扱六ヶ敷候ゆへ搦捕引渡ハ勿論其節異人より理不盡ニ手向ひ候ハ、不得止斬捨ニも可致畢竟異國の爲をも思ひかくハ及懸合候旨申論可然候細川等へ強く達し異人へ弱く達候ハ以之外不宜先ツ異人へ確と達

し請書差出候て其上細川のみならず海岸一統へ御觸ニ相成候方と愚慮いたし前文何レも懸役々了簡をも御尋之上御決ニ致度候也

五月十八日

水 隱 士

本文ニ日本の屬國ニ無之清國の屬國と云を琉人に承り候て又日本人へ承り候ハ日本人にて此方の屬國にて清國の屬國ニ無之と申候時ハ琉人僞を申と云を種として琉國へ行亂妨狼藉可致含又清國の屬國ニて日本屬國ニ□□よし申時ハ當時清國も御承知ニ通り故清國へ一寸斷候迄ニて如何様の事致候哉も難計此方ハ救候事も相成間敷實ニ琉國の心配思ひやられ候何レ薩摩持の事故是れよく御相談ニて薩州并琉國爲ニよろしき様御扱可然候

三六 藤田東湖書案

安政元年十一月十日

謹る申上候夜前御下ケニ三封拜見仕候處最早 營中にて御覽濟ニ分又々

長々御留置にてハ御不都合と奉存候間先刻を取懸り候寫出來候間三封ハ早速御返しの方と存候

一與三郎出府何事歟難計候へ共川路書面にて察候へハ下田をハ動し申度風情ニ相見へ申候下田奉行迄御立今更地震の爲ニ御動しハ甚御失體と存候間別紙試ニ相認奉入 御覽候もし又與三郎は外の事歟も難計候得共御過憂の振被 仰遣候ハ害も有之間敷歟と存候

一昨日 御意御座候伊關ハ能々見候へハ豆と申様ニ認候ゆへ關の様見へ申候へ共ヤハリ伊豆の内に奉存候此段いそぎ奉申上候

十一月十日曉

臣 彪

三封ハ返上伊勢守書面ハ御留濟不申候間拜借仕候

原朱 安政元年十一月

三七 藤田東湖書案

安政二年四月十六日

原朱 (乙卯) 四月十八日鹿島沖へ異船乗寄之義

一昨十六日已上刻水戸殿領分常州鹿島郡磯濱村陸地ハ三拾町程沖合ニ何國之船とも不相分異船壹隻辰巳の方ハ乗寄候旨支配郡奉行并船手頭ハ申立候付壹番手人數差出候手當ニ致候處無程右異船三四里沖へ退帆候旨注進有之候間人數差出候儀ハ先ツ相扣候尤時宜次第出張之手當ニ申付置候旨國許ハ申來候此段及御達様〇以下關

三八 藤田東湖書案

安政二年

少々の品もらい來候者も有之由風聞有之候政府ハいまた何等差圖不致候内船手頭一己の了簡にて水主の者を遣候も不宜又家中の子弟共何心なく水主之者一同罷越異船へ乗入候も不宜聊之品たりとももらひ候ハ尙更不相濟候間夫々相糺以來締合の爲嚴重咎可申付と存候へ共當月十六十七日兩日ハ國許城下ハ一年一度の大祭禮にて群集いたし候折柄異船注進有之

候事ゆへ長々滯泊も致候ハ、右城下の群集海邊へ押出し以之外騒々敷も可相成哉之處前書之通水主共やわらかに問答いたし早く退帆爲致平穩ニ相濟候ゆへ十七日神輿渡御等も例年之通無滯相濟候迎船手頭等ハ自分の出來過候ニハ不心付却る自慢致居候位之模様ニ相聞へ且又異船右様近海へ來候ニ付亦ハ領分の外漁夫共異船乗入候風聞も有之旁前書之者共のミ嚴重申付候亦も並ひ不申答振輕重の目當差支申候尤以來ハ三港之外へ來候ハ、無二念打拂候様達候なれハ此度之儀如何様嚴重ニ申付候亦も宜候處打拂候ハ不宜又やわらかニ懸合候も不宜只々彼次第ニいたし居のそりく上陸いたし候ハ、付添居取計振伺出様にとも申付兼扱々扱振六ヶ敷候益もなく異船へ乗移候のみならず聊たりとも品物もらひ候ハ不相濟候へ共品物ハ不殘引上ケ以來の心得振ハ浦々々爲達可申候へ共前書之者答申付振之目當無伏藏御示教ニいたし度拙領のミニ無之諸國へ引張候事故御内談申候事

三九 藤田東湖書案

安政年間

烈公加筆
「本文中」右へまがひ候云々と認候ハ黒田の紋黒く付候へハまきれ不申候へ共白くてハ如何と心付候故之」

日本の日を表し旭の丸幟を御國の惣船印ニ相用ひ黒の御印を

公儀御船ニ御用ひ候方御相當ニ可有之處源氏の印を日本の惣印ニ御用ひ日を表し候印を

公儀御印ニ御用ひハ如何と存候拙家杯にてハ坐船へハ元來日の丸を用ひ來候へ共諸國大船出來日の丸ハ御國の惣印と相成候ハ、惜きものながら日の丸ハ相止引兩歟葵の紋にても用候積に候諸家有來の船印に日の丸又ハ右ニまがひ候印有之候ハ、不殘爲改可然と存候事

四〇 藤田東湖書案

安政年間

船印之事再應覆議之趣一覽しきりニ先入之説を執候様に候へ共外の事と違日本萬世の目印と相成 事ゆへ今一應申述候洋中へ乗出候儀御免ハ無之共漁船等さへ難風ニ逢候へハ異國へ渡り候儀ニ候へハ乗出候からハ其用心無之るハ不相叶且又近年邊海處々に魯墨の船往來致候へハ旁大船にハ駈といたし候

御國の惣印有之度候萬國の眞似をいたし候にハ無之共萬國にてハ十字其外兩頭の鷲等趣意有之印多く候處

御國にてハワけなき紺白布交を用候ハ不見識其上墨夷眼前紅白布交を用候處へ一段引下り候姿も有之旁殘念に候

公邊にてハ前々旭の丸を御用候由別紙等ニ相見へ候へ共前々と申候も御當家以來之事此度ハ

御國開闢以來の御印を御定めも同様の御筋合ゆへ行々萬國へ御德化光被いたし候御印御用之方と存候天地丸始メ云々も別紙ニ相見候へ共愚老相

覺候處にてハ四ツ五ツの様相覺候右も天晴よき御印に御座候間前之通御用ひにて可然仍るハ

御國の惣印ハ旭の丸吹貫帆印ハすべて中黒

公邊御船ハ朱團子の御印諸家ハ夫々其家の印相用候様相成候ハ、却る

公邊の御威光萬世ニ輝キ可申存候旭の丸ハ入用懸り候と申事相見候共大船製造之上ハ夫式の事ハ不及論扱又色さめるハ遠望分り兼候と申説相見候へ共左候るハ

公邊御印ニ御用被遊候るハやはりいろさめるハ遠望分り兼候わけに候歟扱中黒の名目をかへ候故何の答もなき事と存候尙衆論承度候事

御國の御威光御立被遊候へハ自分公邊御威光相増候わけ御演述の方歟

四一 藤田東湖書案

安政年間

壹萬兩御拜借草稿

此節於石川島製造被

仰付候大船成就之上ハ砲門へ大砲御備ニ相成候儀勿論と奉存候處近年銅材致不足此上追々大船御製造ニ相成候ハ、尙以乏く相成可申一體臺場并船舶へ相用候分ハ西洋諸國皆鐵銃相用候由ニ御座候間去冬中被差出候難形ニ通今般於國許反射竈取建柔鐵相撰候而致鎔化水車ニ而錐入爲仕候ハ、一旦ハ入費有之候とも行々手數等銅銃とハ懸隔ニ相違ニ而格別御武備御手厚ニ可相成被存候間何共被憚入候得共金壹萬兩程拜借被致右製造被申付鐵銃ニ而返納被致度萬一成功無之節ハ去冬々前中納言殿へ被下候米五千俵之内ニ而年々割合返納被致度被存候此段及御内談候様水戸殿被申付候

四二 藤田東湖書案

安政年間

牧閣へ書案

過刻ハ御申進候通り御達案四通之内御用ひ可然と存候分へ付札いたし返進いたし候愚意ハ端船ものも軍艦も全くの雛形を取候のみ歟又ハ御用ニ立候程の御船ニいたし度主意に候へ共右様聞へ可申哉外ニ過慮のケ條別紙ニ書取申候扱今朝返進之書類にて見候へハ蘭人々も筑後々もとくニ申立候ケ條有之よし之處愚老ハ蘭船入津の事さへ巷説にて承候のミ書類ハ更ニ御廻し無之實は了簡にも差支申候以來御相談無之ならハ前後とも御相談無之候方よろしくもし又御相談有之ならハ首ハ御廻し無之尾のみ御廻しにてハ相分り兼申候

每度無伏藏存分申進候也

備前殿

御別紙ニ

藤田東湖書案 (安政)

長崎を伺兩様の書類拜見候處先比も申候通り軍艦數隻持渡候るさへ大ていの事ハ奉行へ御まかせ可然況や今般ハ雛形の論位の事に候ハいつれにてもよろしき様存候へ共御達案兩様之内一ハ大小御目付の評議を御用一ハ司農初メの評議を御用ひ之方と愚慮いたし少々張紙いたし候尙賢考可有之扱遠方ニ罷在候ハ伺書一々御察當有候へハ殘念ニ存し又ずつと御任セニ相成候へハ却而扱兼候情合も可有之歟御達案へハ委細の事情ハ盡し兼候ゆへ各方御内意を振にて別ニ司農杯を奉行へ文通いたさせ候ハ如何其ヶ條試ニ左ニ及御相談候

奉行へ可申遣大意

一端船へ仕懸候蒸氣の雛形其地にて今一ト通り御製造御尤にハ候へ共僅ニ中買計の雛形を又々製候も御不益且ハ蘭人へ對し候も御不見識に候間此度御製造之分ハ其地御備船の足り合ニ相成候様有之度云々
一軍艦雛形之儀長五六間にてハ中々船將滯船中にハ出來申間敷^{烈公加筆}歟左候ハ

、日數無之候ハ、却る十分一歟廿分一ニ明細に雛形を取製造方其外毫髮も遺漏無之様いたし追而本渡御製造の手本ニいたし度もし又船將ハ無程出帆にても船工ハ來秋迄も留置候事相成候ハ、可成丈間數長く實用ニかなひ候様有之度五六間にてハどちらつかずニ存候云々
一船將傳授と申事委細ニ分り兼候へ共端船へ仕懸候蒸氣の扱ハ左迄傳授六ヶ敷程の事も有之間敷左すれバ船將乗居候船にて運用等傳授之積に可有之此方の人先キ方の船にて傳授を受候も面白からず候へ共此位ハ不及是非候歟扱調練と申事相見候處帆の上ケ下し楫の取様其外を調練いたし候を習ひ候ハ宜候へ共萬一陣法戰法の調練をも彼の手ニ屬し相學ひ劔をぬき指揮され候様にてハ失體千萬に候間陣法の調練ハ幾遍にても彼等のいたし候を見分のみにて追而其長を取可然舟の運用ハ水夫のわざゆへ彼の手ニつき習ひ候ともくる^{脱カ}からず云々

四三 藤田東湖書案

安政年間

異國船渡來之節取計方并海防手當等之儀追々被

仰出候趣水戸表へ申達領分海岸備向等は迄有來の儘爲取調城下之道法遠近海之淺深等ハ繪圖面ニ爲取調委細別紙之通に御座候扱紙上ニ取調候得ハ乍手薄も條件有之様相見候得共萬一異船渡來亂妨等ニ及候儀を實地ニ而實意ニ相考候得ハ別紙人數等ニ而防禦行届兼候ハ差見候儀一國之耻辱ハ姑く差置外國へ被對候ハ御一體之儀ゆへ天下之御瑕瑾にも可相成哉と水戸殿には年來苦心被致彼是世話被有之候處此度追々被仰出海防之儀一段嚴重ニ心懸候様御沙汰之趣海岸多之領分ニ而ハ別而篤忝被存候仍而防禦之儀尙更被致評議候處臨機之處置運用の妙ニ至候而ハ筆紙ニ難及候得共大筋之目當兼々相定置不申候而ハ其度ニ至り失錯之程も難計候間件々及御達候

一 異人防禦之器械も種々可有之候得共火器を第一といたし候様被存候

付從來有來之大筒之外當代ニ至り餘程鑄造被申付候得ども兼々申上候通勝手不如意ニ付全く手元仕法ニ而被申付候儀ゆへ存分筒數も通不申候間此上尙更心を用ひ廢寺又ハ不用の撞鐘佛像等故障無之分ハ追々鑄崩し火器製造可被致哉と被存候

一家中末々迄着具心懸之儀ハ先年伺之上於野外甲冑調練取行候以來追々行届此節ニ至候而ハ小給貸具足相濟候者迄も自分着具心懸候様相成候間此上右野外調練停廢不致候ハ、家中武器手届永續可致哉ニ候へ共小國之儀ハ諸規定動キ易き患も有之心配被致候間此後右調練衰墮之模様有之候ハ、

公邊々御察當御座候様被致度被相願候

一 海防ニ不限文武之儀ハ今日之急務就中短兵接戰之儀ハ 神國之長技ニ候間萬一異人上陸亂妨等ニ及候ハ、火器之外 神國の長技を以迅速猛烈の働爲致度被存候間於學校専ら劔槍試合爲相學此節家中子弟共精々

相勵候事にハ候得共是又永續之儀肝要に候間前件同様御察當御座候事ニ相成居候様被相願候

一濱々手當之儀ハ別紙之通實以手薄之儀尤時宜次第城下ハ後詰加勢差出候儀勿論にハ候へ共領分貳拾里に亘り候海岸何れ之浦へ夷人寄來候も難計候へハ壹ヶ所のみ嚴重ニ備へ候も相當不致乍併家中不殘差配り候迎も貳拾里之海岸手厚ニ相備候儀ハ難相成筋に御座候へハ旁致勘考候處濱々并最寄村々之壯丁相撰鎮守氏子等にて組合を定壹ヶ年一兩度も勢揃爲致約束等都而簡易ニ取計萬一之節支配頭は下知次第無二無三ニ夷人打碎き候様之規定ニ相成居候ハ、壹ヶ濱に而人數五六百人より千人内外ハ相募可申候間一廉之備ニ可相成尤平日ハ夫々農事漁業等爲取懸諸事平民通り取扱聊重無之様爲相成候積ニ御座候

四四 藤田東湖書案

幼年時代

尊 大人

拜上

虎 之 介

十四日之御狀拜見仕候春暖追日而相催次第に暮能相覺申候先以御機嫌能奉恐悅候此方一同無事ニ罷在候間御苦勞被下間敷候

一私登之儀ニ付願書文書等迄精敷被仰下候趣書直し備前町に見せ申候處

隨分宜由に御座候間今日前に本書認史館に持參仕候處今日ハ備前町ニ

而ハ病氣引之由ニ御座候間明日早く宅に持參可仕候史館引候御杉山杯に罷越晩に

相成候故也

一萬一豐神童登申候ハ、都築杯と同道可仕旨被仰下候間今日都築へも右之趣申述候處都築申候ハ其儀ハ大人ハ拙者方にも御文通有之候事ニ御座候乍去拙者事ハ願さの相濟候得ハ廿三日方ニハ發足可致候間御同道ハ相成間敷候由ニ御座候明日願を出候而も廿四日歟廿六日ならでハ相濟申間敷候間都築ハ兎角だめと奉存候人物堅固善キつれニハ御座候得共致方無之候

一 伯姉嫁装箱に入無難に相届申候善時ニ雨天ニも無之至極善キ間に御座候又々登せ候儀ニ付今日塙管庫に懸合申候御用人衆に遣候手紙等認候ももらい申候二三日雨中明日安心不仕候と思申候處今夕々天氣快晴に候間明日彌指上可申候萬一雨天ニも候ハ、指上せ兼候何レ此天氣ニハ安心仕候封物之中に職官志入指上申候墓表にしまいこみ候と見さがし申候處急ニハ見不申候間後便指上可申候封之上に大人并縁野之名前下の備前町ニ名前ニ御用ニ認指上申候

一 菊地參り候茶飛田人參り遣申候

一 堀口の遣申候酒之事もはや私上り間も無御座候間此ハ下り之土産物仕度候

一 逗留之事やはり十五日位善かげんと奉存候餘り長逗留ニハ却るあき可申候其上御國許稽古等有之候間十五日位之所宜様ニ奉存候

仲春三六夜

虎拜

尊大人

拜上

四五 藤田東湖書案

江川へ御書案

寒威日に甚敷候處乍例勇氣無撓令欣抔候扱先頃蘭語翻譯相用候様御觸ニ相成候處御觸のみにてハ、公邊御始メ諸家まぢくの唱方出來 模通り如何と存候御自分事ハ年來功者之事に候間老中へ申立候上誰ぞ心易き儒者へ申付器械其外是迄蠻語にてのみ通用いたし來候分々本朝の言葉ニ譯し

公邊御用にて開板いたし廣く天下ニ布候ハ、世間一體ニ相成模通りよろしかるべく候御自分ハ蘭癖抔と人に寄噂もいたし候由之處却る御自分より建議開板いたし候ハ、一段の美事と存候此節登 城不致ゆへ書中にて申入候也

四六 藤田東湖書案

當分の姿にてハ一年御仕立之梅林も七面の繁昌を助け候爲メニのみ相成候半奉存候事

神崎梅林之事

- 一七面佛近來殊之外流行愚夫愚婦を惑し以之外風儀ニ故障ニ罷成候事
- 一御在國中御仕立之梅林ニ仕守シモリ無之候ルハ御ベリ合不宜候事
- 一七面堂御潰し候事
- 一右堂之跡梅林ニ被遊尤七面佛を潰し候のみにてハ俗人の氣受如何に付天神公之小社爲御建にてハ如何可有之哉
- 一右七面跡梅林并一昨年御仕立之分相束ね小家一軒御立梅林仕守シモリ并御目付方下役一兩人も被差置候ハ、花實等折取候患有之間敷候事
- 一花盛之節御家中花見勝手平日參詣も御免にて可然御座候次第尤詩歌管弦也正ハ格別其外鄭聲堅く御停止にて可然歟

右様相成候へハ第一愚夫愚婦ノ惑を破り次ニ好文風雅の道ヲ御開キ被遊御軍用御備之儀ハ勿論之儀一事にて三益御座候半存候尤右之儀ハ餘程非常之事故一ト通り政府へ御懸被遊候位にてハ行ハれ兼可申存候仍御筆にてなり共ハ御目付方へ御意にてなり共

水戸神崎七面佛次第ニ繁昌家中又ハ町家の妻女後家等追々歸依キいたし籠こもりと唱へ大勢一同ニ夜を明し候類にて以之外風儀故障ニなり候由耳に入候處虚實如何水戸へ申遣爲承候様

但家中歸依いたし候もの名前等承候ニハ及不申事

右にて風聞御取被遊御道具立御揃へ被遊候上無二無三ニ江水政府寺社府の内へ御懸被遊一同之内位ニ取計候様仕度ものニ奉存候事

八月晦日夜謹考

四七 藤田東湖書案

乍恐言上仕候深澤甚五兵衛御處置等之儀ニ付愚存之段先日申上候處其節岡部忠藏御用召に罷出候由承り及世上之評判も十の八九迄は外補可仕と相唱へ候付雀躍之餘り別紙申上候筋も御座候處追承候へハ與力取立の御達に御座候由有志之者ハ不及申一ト通りノ人物の内にも失望仕候者も御座候忠藏儀委細御承知被遊候通り俗才相働キ餘程わるかしこき人物ニ有之隨之辯口もよろしく當時江水執政之内第一利口ニ立廻り候様子ニ御座候處執政可爲の任ハ大體を相辯へ休々焉として廣く一國の善を取用ひ公論正議を以政を施事を決候筈と奉存候處小役人風の者上ニ立居候一己の私智を用候儀ハ古今以の外相嫌ひ候儀に御座候間忠藏儀に付ハ先達より下々にてハ内々批判も御座候然ル處夏中御國勝手被仰出候由承り此上ハ當人も定之氣をくじき老年病身とハ申旁さしたる害も有之間敷存候處追々承候へハ難有御筆等頂戴仕り尙又御役料等結構の御沙汰に有之當人も益々勢を得候風説ニ相聞へ既ニ忠藏下向の上には服制も相

ゆるみ可申抔と在町等下々にてすら申ふらし候類ニ有之殊ニ奥御右筆方數人御除キ之儀に付も種々の風説ハ有之候へ共多分岡部の毒に可有之人々推察仕居候砌にも御座候間去ル九日御用も不取敢外補と沙汰仕候實ニ人々の本心に御座候尤去年中同役一同被爲召候節忠藏人物之儀ハ兎も角も忠藏無之候へハ何レにも御當座之儀猶更御指支被遊候旨御直の御意をも承知仕居候間忠藏義を眞の執政相當の人物とハ不被思召御儀とハ奉存候へ共當時外ニ可然大臣も無之抔又封建の世廻り小臣ハ直ニ大臣ニ御擢用被遊候儀ハ時勢に於てハ被遊兼旁是迄被指置も不得已御儀と奉恐察候乍去前文ニ通自分の才氣をたのみ孟子の所謂詭々の聲音顔色人を千里の外ニ拒ムと申様なる人物執政の立場ニ罷在候様にてハ此上たとひ如何様の人材夫々御擢用被遊候迎も模通り兼先日も同役共申上候通郷愿凡庸の者に候ハ、格別少しく持前有之者ハ自然と御疎遠不被遊候ハ不相当勢にも相当候ハ、義公様にて常々御意被爲在候人くひ狗の理ニ相當

り可申被存候御明察も被爲在候通常時大臣殊之外人物無之最早外ニ御見替にも可相成人物中々急々には有御座間敷存候處當時執政之向にも善を好候人物にて其徳望ハ大臣の風ニ有之者も相見へ右様之人物上ニ立居候得ハ下々にても疑心不仕諸役人等も上の御爲と存候儀ハ深切ニ演述仕候儀ニも罷成扱又物事埒明キ兼決斷等果敢取不申患ハ可有之候へ共此儀ハ乍恐

上より御勵し被遊精々御下知被爲在候ハ、甚御模通りも宜しく詭々の聲音顔色をなし候人物無之候迎も御間かけ候儀ハ決有御座間敷奉存候右等之儀申上候儀何共恐入候へ共胸臆○中間本文執政之面々與力取立候儀近來ハ弊風甚しく相見へ追々取立候與力皆柔弱愚庸之ものニ萬一の節騎馬役一騎前の御用相立候者十人ニ一人も有之間敷存候既ニ此度忠藏取立候與力も世上の風説ニハひとつことやらんにて武役も相勤り兼猶又無筆にて書狀も相認兼候者之由右之通り文にもあらず武にもあらざる人物分

寸の功もなく多分の知行拜領仕り士人の末席にも加り候儀畢竟執政の面々

上の俸祿を以己が私恩を施候理ニ相當り以之外不宜弊風と存候右等之儀ハ數多可有御座候へ共乍序申上候事

相包兼無伏藏申上候以上

十二月十四日

四八 藤田東湖書案

原朱尾公御繼之儀紀公へ御書案

一簡啓上仕候今以朝夕ハ微冷ニ御座候處愈御安全被成御座奉恭賀候爾來ハ時々動止をも不相伺候段御海容可被下候扱ハ尾公御即世御同様絶言語候御年若之儀且御長病にも無之別ニ殘念奉存候右御跡目之儀ハ攝津守并御家老共評議の上名護屋へ相運ひ老公思召を伺ひ老中へ内意申達其上に

て表向御養子御願ニ相成候事と存居候處去月廿四日津守罷越別紙手續ニ
通致一決候よし申聞候ゆへあまり不審ニ存候同夜鈴木丹後呼寄粗愚存
をも申述候へ共最早老中へ請をもいたし候由にて廿六日に至り彌田安
殿御相續之儀被 仰出候尾州之儀 敬公御血脉ハ無之南龍公の御血脉
と相成居候間田安殿御相續之儀不宜と申ス愚存にハ曾亦無之御養子の
儀ハ國家の大事に御座候間衆評の上名護屋老公思召を相伺候上一決不
致候亦ハ御筋合不宜尙又三家も三卿も同様の御扱ニ相成候亦ハ後來の故
障にも可相成との愚存ニ御座候へ共何を申も津守近縁の事ゆへ強而申候
へハ田安殿御相續を嫌ひ津守へ身を持候様に相聞候遠慮も御座候間丹後
へも其段申述候へキ此度之儀ハ最早過去之事に相成候へ共以後の例ニ不
相成様仕度事歟と愚慮仕候處右様之儀ハ老成の御方ハ御主意被仰立候へ
ハ 上の御信用も宜き儀と奉存候間篤く御賢慮の上名護屋老公へも御内
評の上以後の例ニ不能成様御工夫被爲在候ハ、御示教被下候様仕度奉存

候仍亦別紙寫等相添内密得貴意候書取不行届候間宜御推覽可被下候謹
言

四月

四九 藤田東湖書案

御親書謹而拜見仕候伊賀守へ御書案拜見之上御案文之通相認奉呈上候尤
牛車之儀ハ全く御名目のみにて譬ハ將軍家ニハ御代々淳和并學兩院別當
と 宣下ニ相成候共御虛名乍恐
上にも黃門の御職掌ハ御勤不被遊如く武家の官位等ハ皆虛名にて
將軍家にも重立候節も御轅のみにて御車ハ御用不被遊先年も白石の建議
のみにて享保以來ハ別亦右御
公家めき之儀御嫌被遊候へハ此節車等の事被仰立候
享保の御主意云々と申ス所にて評議にも不及御斷り申上候愚察仕候ゆへ

相除き申候尙更御賢慮可被遊候

一 西山醫學館郷士劔槍上覽之儀早速相達申候定る頭取を奉伺之儀と存候
尤檢地ハ昨日下川合村にて見かけ候處此天氣合にてハ所詮御無益と奉
存頭取へも不申聞候事ニ御座候

一 彦九郎呈書拜見被 仰付御意之趣乍恐御尤ニ奉存候此度執政欠席之儀
ハ實ニ一國の大議と存候小役人の撰ハ惣懸りにて評義仕り執政の撰ハ
一 兩人の執政と奥御右筆共等暫時の評義にて御請申上候勢毎度不堪滯
歎奉存候以上

三月八日

五〇 藤田東湖書案

質素儉約之儀追々厚御世話被爲在諸事御行届ニ相成候處御家中妻女髪之
飾之儀世間一統とハ乍申次第ニ高料之品相用ひ無益の入費不少奉存候間

乍恐御世話被爲在候ハ、瑣細之事の様にて大ニ御救ひニ可相成哉と奉存
候乍併鼈甲等之儀ハ品の見分ケ甚六ヶ敷御座候間品の甲乙を以御定被
仰出候ハ見答候儀も行届兼候ゆへやはり是迄之通上品相用候向も出来
御模通り不宜奉存候仍ハ品の善惡ニ不拘敷を限り御制禁被仰出候ハ、
御行届ニ可相成哉と奉存候たとへハ縁付不申候女子かんさし壹本に限り
相用候様人の妻と相成候者かんざし壹本こふがひ一本ツ、に限り相用候
様此外櫛等相用候儀一切不相成候様

右之類ニ被 仰出候ハ、數をまし相用候者ハ早速目立候ゆへ御定を背候
者も有御座間敷殊ニ娘之内ハかんさし一本にて相濟婚姻之節に至りこう
がい一本求候へハ髪之飾り相揃候事ゆへ甚便利宜く可有之奉存候是迄の
姿にては勝手相應之者ハ高料の品數本相用ひ隨て困窮の者も無益とハ乍
存女子共の儀ゆへ申合兼無據相調候儀に御座候處前文之通り數を限り被
仰出候ハ、たとひ高料の品相用候迎もわづかに壹貳本の儀に御座候間格

別の失費も無之困窮の族ハ勿論一統格別の御救ニ可相成哉と奉存候

右かんざし等御定ニ儀先年或諸侯名前失念ニ屋敷にて右様の定相違大ニ行届候旨同役彌兵衛兼々承居候處御儉約ニ儀追々御行届ニ相成右一ケ條のみ未タ御達も無之御家中の傷ニ相成候儀殘念ニ奉存候間私共より言上仕候様彌兵衛度々申聞候處此度御家中餘多の類焼に付ハ髪飾も多分焼失仕り又々追々取あつめ候類も可有御座奉存候間少しも早く御定被 仰出候ハ、一統難有奉存候半と愚慮仕候間同人存意ニ通書取乍恐奉入御覽候已上

五一 藤田東湖書案

乍恐以封書奉申上候今日石見守始先日被爲召候族一同登 城候處石見守始右門人どもいづれにも歌のしらべ間ニ合兼尤強ニ相認候儀ハ相成候へ共何を申も萬一

天覽

台覽にも入候も難計儀に候へハ乍不及人々の手ぎハ一杯にハ仕度奉存候間何卒明晝迄御猶豫奉願由此儀ハ頭取申廻り候事と奉存候扱書家書家の儀は別段差支も有御座間敷存候處詩の儀ハやはり歌同様差支可申存候尤晴軒并兩教授等達者之族ハ格別愚臣杯の如キ中絶仕候ものハ必至と難義仕候仍ニ清衛門善衛門等へ談合仕候處上の思召ハ全く一時の御座興のまゝを不取敢爲登被遊候 思召ニ由乍恐御尤ニ奉存候處臣下の身ニ取愚慮仕候へハ御國中にて笑ハれ候ハ更ニ厭ひ不申候へ共京都江戸まで耻をさらし候ハ一人の耻にも無御座重々恐入候儀と存候明廿九日御便日ゆへ御いそぎと存候へ共たとひ晦日朔日別々御飛脚御立被遊候も可然御儀と奉存候間何卒兩三日 御猶豫被遊候儀ハ相成間敷哉右ニ付左ニ通奉願候一寄合書の本意ハ詩歌の手ぎハよりハ目ごましく出来候處を賞翫仕候儀

に存候四十人計の内ニハ兼備の人計も安心不仕候間何程詩歌ハよろしく御座候も筆跡等不得手の向も可有之夫がためニ見事なる御幅をけがし候様にてハ奉恐入候事

一 詩歌の本意ハ意味句調等専らに御座候處筋を引候中へ認候てハ古詩相作候人ハ極細字ニ相成且手跡不宜候ハ、詩歌迄悪しく見へ可申奉存候事

一 右之通に御座候間可相成御儀ニ被爲 在候ハ、詩の卷一卷歌の卷一卷詩ハ晴軒別書仕り白樂天の詠を相分け被遊候儀等相認晴軒の作を認其後順々相認歌ハ石見守筆頭にて同様相認扱寄合書の方ハ書畫専門之族のみ相認候ハ、御幅も見事ニ出來扱又詩歌とも面白くも出來可申哉石見守申聞にも寄合書へ歌を認候儀ハ少々差支候へ共別ニ歌の御卷物出來其別書へ先つ

御趣向のけり□等御分け被遊候意味相認候ハ御新法にハ候へ共面白キ

御工夫にて何の御次第も有之間敷旨申聞候

右之儀もし御聞濟にも相成候ハ、乍恐早速頭取へ被

仰付來月二日三日迄も御日のべ被 仰付別書之通り寄合書二枚詩歌都合四卷被 仰付度存候相成候ハ、詩の始メへ御作歌のはじめへも御詠被遊寄合書の御額ハ今日之通被遊候へハ重疊と存候石見守もくれくれ申聞御座候處いかさま文國の御名も御座候儀何程 御座興にても被進候からハ不容易存候間此段奉入 御聽候已上

九月廿八日

臣 彪 上

追ふ奉申上候本文之通り申上候迎石見守等達亦御免奉願候わけにハ無御座候

御意と御座候ハ、如何様にも可仕候へ共可相成ハ本文之通ニ仕度旨くれ申聞候事ニ御座候已上

五二 藤田東湖書案

此度四郡之儀被 仰出候付るハ我々共ハ勿論元々并惣手代共迄盡精力相勤御國中總一體に相成候様取扱御仁政御行届に相成候様被遊度 尊慮之趣奉承知何卒厚キ 尊慮之程十分ニ御行届に相成候右仕度一同苦心仕候仍る段々相談仕候處一體御郡方手代之儀ハ郷中一切の御政事引受相勤候職分に御座候間他役所一方仕候勤筋と違別る辛勞太儀仕候間往古ハ郡方手代共御切符過分之御あてかいに有之御代官手代之儀も引續キ相應之御切符に相見へ候處段々に相成近頃ニ至候ハ御切符七石ニ限り候様相成大廳之勤功御座候てハ容易ニ御増不相濟候間人々勵も薄候のミならず家内人別大勢之者ハ今日の經營にも指支候へ共勤筋繁多に候ゆへ内證手仕事等仕候儀も相成不申自然未熟不心得之儀も御座候様相成候事に御座候右之通人々も勵も薄御座候ゆへ格別之人材ハ召抱兼其上御勘定處御手勝手方手代共ハ相應之御あてかひにも有之殊ニ運ひも早ク候ゆへ追々右

役所へかせき候者御座候ても引留候儀も相成兼次通りのみ人物のみ残り居候様相成申候何事もなりノニ相勤居候事ニ候處此度ハ大切の御改正に御座候間人々氣量一抔爲相働候様不仕候てハ相届申間敷奉存候間何卒御切符一統御増之儀相願可申奉存候へ共諸事御省略之御砌御判談も御六ヶ敷可有御座奉存候間別紙目論之通り無御差略相濟候様仕度奉存候左候へハ新規試ニ召抱候類の外ハ何レも本祿七石御扶持旁三人ツ、被下置浮キ切符御扶持不殘御役料に相安置人々器才の甲乙精不精之品ニより夫々配分申付候ハ、一統相勵存分相働候様相成可申奉存候

五三 藤田東湖書案

一連離除奸何れが先ニ可相成哉云々

當時之姿にても連のミ離候迎も有司共即日ハ老寡君へ諸事決を取候儀何共安心不仕たとひ有司共ハ老寡君へ伺候迎も老寡君に在て存分

下知も不致兼候勢にハ有之まじきや
又連ハ是迄之通にて奸のミ一兩人退けられ候も大臣へ正論舉り候儀
何共安不仕尤
幕命に候ハ、無異儀筈にハ候へ共先例舊例其外此故障彼突中りぬ並
らへ立候へハ何れの家にも夫々無據意味も有之ものに候へハ夫迄を
も御破り幕を被命候御儀ハ御六ヶ敷可有之哉と過憂仕候

五四 藤田東湖書案

以別紙申上候道路の説に承候へハ不遠 御任官の御内沙汰も被爲在候
由實説にも御座候ハ、恐悦無此上御儀奉存候尤當時の諸侯國中の仁政武
備とも打忘レ士民の膏血をしほり候を請託賄賂に相用官位を求名聞を文
り候類ハ實ニ笑止千萬之儀に候へ共是等之儀ハ委細 上にも甚御見ごり
被遊候御儀ニ候へハ 上を御求被遊候 思召ハ有御座候間敷奉恐察候得

共畢竟幕府御役人等

上の御英明を奉畏右等之儀とも相働キ媚ヲ 御家ニ求候儀にハ有御座間
敷哉と疑察仕候何れ此度之儀御求不被遊候を格別之御慶事被爲在候段實
ニ奉恐悦候處下々人情を以奉恐察候儀ハ恐入候へ共富貴に溺れやすきハ
人情の常ニ有之輕薄の言を承候へハ追従とハ乍存其人物にくからす存候
儀是又人情ノ常ニ御座候間幕府御役人之儀ハ乍恐御油斷不被遊候様奉存
候

哀公様御初政兄臣一正へ被下置候

御親書別紙之通に御座候處最初ハかく迄羽州等の姦をも御洞察被遊候處
乍恐御名聞を御求被遊候御心ハ御間違ひ被遊羽州を御使ひ被遊候を御永
續等御求被遊候内姦人共忽ニ 御胸中を推察奉後ニハ悉ク羽州の術中へ
御陥り被遊候段今更嘆敷次第ニ御座候
上にハ御相續已來諸事實用專一ニ御心を御用被遊候 尊慮に被爲在右等

之儀彼是申上候ハ恐入候へ共乍恐近來の御勢にて奉恐察候へハ最初私に
ハ御政事の御世話不被爲在御實用御勤被遊候 尊慮も下々迄相響キ候儀
無之有志の士一同疑惑仕居候間存分申上候以上

十二月九日

追申上候別紙今日爲差登可申と過日相認置候處今日承候へハ執政岡部
忠藏御用召にて罷出候由爲國不覺雀躍仕候右ハ兼て苦心仕居候義乍恐に
ハ候へ共かく迄大本ハ御正し被遊候
御英斷被爲在候とも不奉存別紙にも彼是存分之儀相認候間今日認直しニ
ハ指上候筈に御座候處指懸り間に合兼候付今日の御用にて意味相違仕候
分ハ乍恐朱書を以相記し呈覽仕候以上

十二月九日

五五 藤田東湖書案

見習之儀草稿

當職之儀古來ハ先輩數多有之御役方御番方等之差別無之廣ク御撰ニ罷成
候儀勿論と奉存候へ共寛文中當職副役并見習等之姓名有之既ニ大井武
兵衛平賀勘十郎等ハ追申本役被 仰付候様相見へ其後副役等之儀も不相
見候處畢竟當職之儀御代官ハ被 仰付候者多分ニ相見へ御代官方之儀御
所務專一之勤筋にハ御座候得共郷村へ拘り候儀ハ御郡方一體に御座候間
當職被仰付可然人物先ツ御代官へ御試み被遊候姿にも被成候ゆへ別ニ副
役見習等被 仰付候儀も相止み多分御代官ハ御撰みニ罷成候御儀と奉存
候處寛政年中兩役所御合併之上御代官御止メニ相成候へ共享和年中柳瀬
半七郎皆川彌六兩人當職見習被 仰付其後追々引續キ被仰付月番役所へ
相詰尙又寄合相談之席へも相加り諸御用見習居候内郷中の利害役所之得
失をも兼ハ相心得候ゆへ追申本役被 仰付候得ハ甚足り合に罷成候ハ不

及申他へ轉役被 仰付候も夫々格別之御用ニ相足り候様罷成候儀と存候然ル處去ル辰年中當役惣御入替之節右見習之儀も中絶仕候間可然人物御撰之上先年之通見習へ御試み被遊土地方其外農政之儀諸事精熟仕候様罷成候ハ、御代官方御所務筋專一ニ相勤候者御撰ニ罷成候とハ懸隔之相違ニ可有御座奉存候乍去一旦見習被 仰付候者ハ必本役被 仰付候様罷成候歟又ハ見習相勤不申者ハ本役相勤兼候様罷成候ハ御故障御座候様奉存候間申上候迄は無之候へ共此上廣ク御撰之上格別之人物ニ器才御座候者ハ直ニ本役被仰付且又一旦見習被仰付候者にても格別之器才にも不相見候ハ、夫々他へ轉役被仰付候ハ、御模通りも宜しく可有御座奉存候尤見習之儀同勤役之上不斷家來ヲも召連事に寄郷出も仕候勤筋ニ有之旁小給にてハ太儀之筋にも御座候間此度被 仰付候ハ、御役料先年之御見合御殖し被下置候様仕度奉存候猶宜しく御判讀御座候様仕度此段申上候已上

十月

御 役 名

五六 藤田東湖書案

極密一書啓上仕候當年ハ近年ニ無之大暑先日一寸凌き能相成候處又々立返り申候四九一六さへなれ不申ハ大よわりに御座候御地ハ暑もつよく候上毎日の御出仕奉察候先頃ハ御懇書之趣きもにめいじ難有奉存候間早速御再答可仕候處いつれにもしうと兩人疑心深く候間乍存御無沙汰仕候いなかよめの手ぎハにてハ此上しうとの機嫌取受候事所詮六ヶ敷相覺候乍憚御言葉にあまへ相願申候此上何分無御見捨御指圖之程偏ニ奉願候扱廿六日御運ひ着之後新八郎罷出伊を奥右部やへよび其後愚をもよび候間参り候へハ岩舟一件水門除キの由其後伊新松一同御黒書院御入側にて暫談合臺子を以愚をよび申候間参り候へハ松申聞ニ岩舟の事水門様御除キにハ候へ共あまり事がら行違ひ居候間やハ御當人へ爲御見ニ可然と

柵町様御了簡の由申候愚ハ更ニ前振も不存岩舟の事ハ今日初運ひにて存候へ共玄蕃ハ何も相心得ケ様なる事ハ當人へ爲見不苦との事にて愚に於てハ別ニ存無之旨申候而部やへ歸り申候其後鈴も御入側へ參り三人にて暫相談之様子愚ハ留守居番に御座候間委細にハ分り不申候へ共前後の口うらにて考候に岩舟の事あれほどに厚く世話いたしたるに恩をあだで返すといはぬ計又鈴申聞之内ニ血脉ハおそろしきもの當院主も氣がちがひ候哉又御運ひの内ニ此方の爲に相成間敷との文儀兩人からくとわらひ江戸でハどんく歟存分に取込居ながら爲ニ成間敷とハかたはらいたし杯其外とかく貴君御尊筆ニつくし難く御座候此間中の様子を見候に岩舟の事ハ伊が鈴へ身を持御腕の事ハ鈴か伊へ身を持ち相互ひ此二ケ條にくつたくの様子其中に愚ハ何も不存目計ほち致居候景色御一笑可被下候定めて明日御返書ニ相成候事と存候へとも右ニ通り内實ハ皆鈴伊打合せに御座候間御ふくみにも可相成哉と全く貴君へ計申上候御火中可被

下候いろく相伺度事御座候へ共今日も只今退出いそぎ相認筆廻り不申候間追々可得貴意候以上

尙々先日中ハ家來一條に御心配相懸候半と氣の毒仕候右に付るも私大心配御察可被下候先々無事ニ暇さし出し前中様ニも存候外御立服も不被爲在御儀と相見へ又伯父も安心ニ由申來大ニ安心仕候私もうか一月計相勤候へ共今以更ニ御もよう不相分心配のみ仕候來月初月番に御座候御心付も御座候ハ、何卒無御伏藏御さしづ偏ニ奉願候以上

又申上候本文御内々御文通仕候事相萬一伯父へ御咄等御座候へハ直ニ此方へひびき申候間此上共何分御含可被下候

五七 藤田東湖書案

一私智を用ひ玉ハす廣く人ニ取て善を爲し玉ひ委任して成功を責る道を

行ひ玉ふべき事

一剛直を近づけ邪佞を遠と申玉ふべき事

一大臣を體し玉ひ鼓舞作興せさせ玉ふべき事

一文道武道次ニ文藝武藝の事漸と姑息と中庸を郷愿之事

一江水隔絶之事

一兩派の辨之事飛田村田

一人物狂狷郷愿之辨之事

一鑒察府の事

一會計府の事

一南龍公碁盤の圖の事

一一郡を扱候すら六かしき事

一有司皆決斷ニ乏しき事

一阿津松崎平目小澤高安等皆改正の人物ニ非る事

一御孤立の事

五八 藤田東湖書案

辰年

教授之儀

辰六月四日江戸

去月廿九日量介御返事被 仰付

一學問御引立且風儀御改正ニ爲青山量介へ講讀御吟味被 仰付史館之方
ハ日勤ニ可被遊 尊慮ニ處右ハ暫御見合御次講釋のみ爲御持可然旨申
上候處是非學者之風儀御改可被遊 尊慮に付藤田主書へ惣司被 仰付
青山へ教授被 仰付右兩人學問引立ニ工夫申出候様可相達旨御筆を以
與一衛門へ被 仰付候付迎も被仰付候からハ小宮山次郎町奉行御免格
式御進に量介一同教授被 仰付可然旨申上御國へ相談候事

同日別書狀

一惣司之儀與一衛門之方可然旨相運候事此節與一衛門出府

同日

一主書方御用達之事序ニ御懸ニ付相談ニなる

同九日御國々

一教授之儀ハ此節御目付方も片付不申内又々館中の權を御押被遊候ハ未穩候間御見合可然旨

一惣司ハ與一衛門可然旨量介ハ御次講釋のみ爲御扱旨

一主書御用達ハ不宜達ニ御懸候ハ、若子様御傳可然旨

與一衛門方下り持參御用之内

一小宮山青山教授掛り被 仰付史館御吟味大廣間講釋水野爲持切史館之儀ハ朔望御料理日之外諸役所同様日勤之御内慮
七月廿四日御國々

一前件御内慮御尤奉存候處小宮山ハ御町奉行之方此節御動シニ相成兼候間先御見合史館日勤ハ可相達處同しくハ 御筆被遊其上我々申含度旨

一青山教授御見合ニ相成候ハ、御次講青山持切同人差合候節ハ史館ハ出役にても宜候へ共川口介九郎御小納戸被 仰付掛り申付可然旨
七月廿九日

一史館のみ日勤教授御立無之候ハ一體の 尊慮ニ齟齬いたし候ゆへやはり教授可被 仰付候小宮山手放兼候ハ、青山川口可然との 尊慮に付川口ハ人物不宜旨申上候ハ左候ハ、やはり小宮山申付候様町奉行ハ外にも人物可有との 尊慮に付尙更及相談候旨

但次郎衛門御轉にて差支候ハ、外人物にて教授被相撰被 仰聞候様

八月十四日江戸々

一小宮山指南ハ御在國迄御見合夫とも達ニ 思召候ハ、次郎ハ御檢御行

にて量介一同兼職ニ爲持講釋御吟味大廣間御役格別爲持外ニ於内御殿
兩人講釋右出席に御家中講釋相成候との講釋被 仰付漸々學風相直
し追ふ如何にも手を廣ケ候様にとの儀御同心に付相任候處御在國後に
てハ上書等出御面倒に候へハやはり只今被 仰出御在國之節ハ小宮山
青山之手ニ付不申者ハ表向之席へ一圓罷出候事不相成様にも不被遊
ハ中々學風移り申間敷旨 御意に候處今一應於實地御了簡被有之候様
にとの旨

八月廿四日御國々

一尊慮之通被 仰付可然と申合尤逆も被 仰付候からハ何れにても同じ
事に候間矢張本職被 仰付可然申渡等別紙ニ同論ゆへ館之方ハ日勤之
儀是又別紙ニ同論及相談候
尤教授懸候門人ニ無之候ハ一圓表立候御席へ罷出候事不相成様に
との御儀ハ不容易候間取調不申旨

九月十九日

一別紙等爲御登にハ相成候へ共實ハ不容易儀此節御目付等之儀も有之人
氣不穩候間先御見合之方と申上其通り御任せ被遊候間別紙致返進候事

五九 藤田東湖書案

御親書 御下ケ被遊謹る拜見仕候私儀病中にハ御座候へ共不得已左ニ
奉申上候

一 寺社改革ニ付金右衛門へ寺社奉行可被
仰付との御儀如何様なる
尊慮歎難測候へ共金右衛門義年寄ニ罷在候てさへ寺社改正更ニ行届不
申況ヤ若年寄退役仕候ハ、佛の爲ニかたきを御取被遊候同様と奉存候
一 鈴木庄藏谷佐衛門等調役被
仰付候との儀

御書に於只今始る奉承知候儀如何様之 御含歎更ニ愚存ニ及不申候
一 織部儀金右衛門跡ニ可被
仰付との儀右人物ハ何等御次第有御座間敷乍併
尊慮にて 御撰みトハ不奉存候
一 寅壽英臣云々之儀何ほど御怒被爲在候迎も水戸の勢ハ左様に御座候右
は委しく不申上候迎も
御明察も可被爲在哉と奉存候
一 愚臣撰び候人物御用ひニ被成候付憤り候旨奉恐入候處 愚臣儀ハ罪も
なき金右衛門ゆへなく御轉シニ相成候儀國家の變と奉存候間過刻
君上并執政へも申述候事ニ御座候撰びの人物御用ひニ不相成儀ハ此度
にも不限御儀第一調役等之儀今日
上らも 御意無御座候

六〇 藤田東湖書案

其方儀

前中納言様御厚恩を蒙り若年にて重キ御役儀被
仰付社御改正等別ニ抽致精勤委細
思召をも承知仕候處去ル辰年中俄ニ御參府御隠居被遊御連枝方御後見被
仰出御家老始夫々嚴重御咎被 仰付候へ共其方儀ハ右御咎ニ泄候ニ付
ハ
前中納言様御心底ハ勿論御改正筋之儀委細ニ御連枝へ申上品ニ寄
公邊へも奉伺質素儉約文武御引立海岸防禦等之儀ハ不相替持張御目鑑を
以御撰用ニ相成候族も可成丈居置諸事實意を以相勤御幼君様御傳立方等
抽丹精候ハ、御家中人氣も不相動御模通も宜く可有之候處其方事俄ニ致
變心右御隠居被 仰出候即日御連枝方御扣所へ罷出是迄 前中納言様へ
數度御諫言申上候へ共一切御取用不被爲在候ゆへ此度之御事ニ成行候段

跡方もなき虚言取繕申上大奥向をも同様相欺き右に付るハ正論有志之者
不殘絶盡し不申候ハ御國中治り兼候旨致發言上書候路嚴敷相塞き讃岐
守殿へ罷出不容易儀申立其外不當之取計不少且又表方へ御轉之後并ニ隱
居慎被 仰出候後も身柄ニ不似合之所行相聞件之通以前ハ御改正向等思
召ニ先立專致決斷候身分ニハ乍罷在直様致變心莫大之御恩致忘却前後表
裏之始末姦曲之罪難遁不束至極に付被 仰付様雖有之悉御用捨被遊格式
被召上其身一代松平松之允へ御預ケ被遊候條屹と相慎可罷在者也

一

萬

其方父 不束之儀有之松平松之允へ御預ケ慎被 仰付候に付跡斷絶
可被 仰付候處家名御惜被遊別段之儀を以貳拾人扶持被下置小普請へ御
入被遊者也

藤田東湖手錄

第四 藤田東湖手録

一 外岡一件風聞

天保三年九月

三年 壬辰九月永井政介所聞

召捕物御用罷出候節外岡龍三郎殿風聞をも密ニ承候様御頭様を被仰付候次第左ニ通

一 御勘定山田壽之介下坐觸ニ亦通行ニ付外岡龍三郎殿道脇へ寄り扣候へハ何者ニ由相尋候付水府御家中ニ由相答候へハ駕籠脇ニ侍下坐いたし候様に申聞ニ付下坐ハ致兼候趣を相斷候處侍参り龍三郎殿の肩へ手をかけ押候ゆへよろけり候程ニ由無間駕籠も通りぬけ同勢ニもの口々に悪口いたし通りぬけ候由ニ處龍三郎殿引返し用捨成兼候趣を申以前の侍の笠の上よりあこの下り候程ニ切り下候由外にも手を爲負候由其内

ニ人々かけ付戦候所四人に手を爲負自分も疲れ候處壽之介鍵持之者やりに而脇を突通候ゆへ及落命候由壽之介家來も九死一生之者も有之由物語候事

右ハ野州佐野の郷同所を三里半北の山へ入り下千波村百姓長八宅へ八月末のころ艸津を立石村邊を通り下り候武者修行之者参り六七日滯留仕候内物咄之由ヲ佐野之豪家青山百太郎を直ニ承り申候

一佐野邊の風聞も喧嘩の起リハ右ニ同し七八人と戦候所を鍵持後口より突留候由

一壽之介下坐觸にて通行仕候所龍三郎殿行逢候而下坐不致扣居候處駕籠脇を侍参りかぶり居候笠を引捨じつてにて貳ツ三ツ打候よし間もなく駕籠も通りぬけ候所同勢之者共悪口いたし通り候由然ル處貳町程も行過キ龍三郎殿鍵持をハ荷物へ付置自分ハ支度いたし追かけ聲をかけ已前ニ被打候待へ笠の上をこの下り候程ニ切下ケ二の太刀に而大袈裟

ニ打候へ共薄手にあかた先を股の邊までそげ候て切り下ケ候由其内人々出逢八人程を相手ニ鍵打合候内鍵持後口を突抜候由之事

右ハ同國梁田宿中屋喜三郎と申もの八月廿七八日之頃いかは湯を歸りかげ草津温泉歸之士へ行逢中山道倉ヶ野宿にて同宿承候よし直ニ承ル

一何方の者か不分旅人之由此もの喧嘩の場所へ行逢遠方を見候處八九人程と打合候處をやりにも後を突通し候よし是ハ梁田邊の風聞

一上州桐生邊の風聞も右同斷に付略ス

一龍三郎殿馬に乗り鍵持ヲ連歸路に而壽之介ニ出逢候所下坐觸有之付馬を下り往來をよけ通り候處を駕籠脇の侍参り冠り居候笠を引捨むなひもを取りすへ候内ニ駕籠ハ通りぬけ候ゆへ物別レニ相成候所龍三郎殿鍵持をハ荷物へ付置自分計引返し間合四五間迄ハ静ニ歩行夫を走りかゝり候へハ已前を侍出合候處を笠の上を切付ケ二三ヶ所手爲負候ゆへ

働も不相成候處ニ人々追々出逢戰候所又一人貳ヶ所手を負候よし都合七八人にも打合候内鍵持後口をやりにも突候由之事

一 水戸様を隠密之者貳百人も出居由風聞候事

右ハ上州太田宿の風聞喧嘩之次第ハ畝歩改請之書付内見を願爲ニ澤渡之湯の邊迄参り候節承候よし

一 九月中旬古賀横町常光寺内の老僧信州を草津へ廻り立石村ヲ通り懸り候所上の御役人檢屍之由にも村人足之者罷出居候處へ立寄り立石坂之茶屋に人も居不申ハ何之次第と相尋候へハ人足共申聞候ハ此度御勘定さまと 水戸様御家中此前にも事起り喧嘩出來大變ニ相成此村杯ハアサ土地にて當時最中之渡世に候處あさをハ皆くさらかし彼是三十日計人足ニ村中能出候ゆへ誠ニ無此上大難溢に候猶又其場所并喧嘩之様子相尋候得ハ場所ハ是より三町計の所へ死人ハ箱をかぶせ置候而人足大勢番致居候間定而見候半死人ハ鹽ニ致候而ハ金も入候間其儘致置候間

虫など甚にはひ候間相しれ候筈喧嘩之次第ハ御勘定の駕籠へ近寄脇之者へ手を爲負籠駕へ切り付候所壽之介ハ駕籠を逃出候付侍兩人へ手爲負其内ニ壽之介鍵を取出出合下突付候へハ倒候處を土手を突返候ゆへ落命之由侍も深手之由人足も申候由

一 此度御勘定畝歩改ニ而増永の達有之候へ共金さへ賄候へハ相濟候由此村等五ヶ村にても金五兩を出し受見濟候由

右ハ九月廿六日上州境宿之脇酒やにも右老僧より直ニ承候事

一 九月廿八日上州大戸宿を壹里外東之山ニ小柄山大權げん之祭りに付参詣仕候處余程人も出候祭り御坐候間數人へ尋候へ共何レも遠慮仕り候様此方の咄のみ承候處一人近村之者之由四十計の男之咄

一 壽之介下坐觸にも通行龍三郎殿道脇へ扣候へハ笠を取候様申ニ付水戸殿家中之趣相答笠をハ取兼候よし申候處壽之介家來参り龍三郎殿冠り居候笠を取捨押倒候ゆへ着類もよこれ候由仍而龍三郎殿次第を尋候へ

ハ御朱印御證文之譯承度候ハ、草津まで引返候様申通ぬけ候由仍而龍三郎殿引返候處其様子如何にも不宜候付御代官山本大膳手代も龍三郎殿を申なため候よし主意ニ不叶候歟ふり捨追懸ケ候而駕籠近ク參候へハ何者と侍萬藏聲をかけ候處を直様切付候由駕籠へも打懸り候とも申候夫々打合候人數ハ駈とハ分り兼候へ共大勢と申事ニ御坐候乍去萬藏倒候後ハ老人之者一人働候歟余ハ刀を持候と申計爲指事も無之との風聞御坐候戰候處を後口を鍵にてつき候と申事に候へ共壽之介とも鍵持とも申駈とハ不相分候へ共壽之介ニ可有之と申事ニ御坐候

一以前ハ怪我人三人と承り候處此ハ貳人と申事に御座候

一突候鍵ハ余程達者之由直ニねじり倒候由後ニ刀に頭等へ疵付候風聞之事

一はるな山之北蟻川村之仙達本ハ高松之浪士之よし此者之咄水戸之御家中ハ余ほど手きゝの風聞に候所切り候場所何レも見込違候ゆへ取のぼ

せ候歟又ハ沙汰程にハ無候歟と申事ニ有之壽之介ハ鍵ハ達者之由なれども後より突通し其上死候者へ疵つけ之始末更ニ論ハ無之もの如何にも余人と爲戰置仕留候には相違無之事と相見候由咄も承候よし

一土屋茂八郎檢使之砌やりきすとも駈とハ申兼候と申述候由にて取沙汰有之評判之事

一須賀尾宿之東七八町計之處有之茶や佐次右衛門之咄ニ喧嘩の次第ハ前ニ小柄山にて承候と大略同しに付略ス壽之介家來三人怪我人之由に候所此所ハ貳人と申事に候又やりハ余程達者にて突候砌やり玉ニ上候位と申沙汰之よし直ニ承り申候

一立石村庄やにも承候所此者ハあと々參候得共誠ニ間もなく喧嘩ハ事濟候ゆへ事がら不相辨由右茶やの物語を直ニ承り申候

一須賀尾宿よし野やと申旅店之主人事がらをハ申兼候様子に候へ共龍三郎出立候砌大言を吐候事杯ハ皆々作り事ニ可有之候由つきし人は鍵持

にハ無之候由風聞是も直ニ承り申候

一中の原と須賀尾との中程峠茶やニ老人の女居候所にて承候處壽之介ハ喧嘩の砌ハ牀几ニ腰かけ見届居一人の命と申ハ大切に候間不殺様杯被申候由又侍之内刀にて龍三郎殿之肩を切候ゆへ倒候よし如何にも龍三郎殿草津出立之砌ハ宿にて取おさへども承知無之是非 公義ノ役人と出逢見度よし被申此邊の風聞草津迄の茶や并草津茶や旅店之事とも皆是のみ咄申候又土や茂八郎を働のある者候由風聞いたし此風聞不致ものハ喧嘩の次第ハ不辨事とのみ相はづし候事

一山田壽之介泊り殊之外近ク一日路を二日ニいたし村々難澁之由其外ハ非道らしき事も無之事

右河原湯本陣孫左衛門之咄直ニ承ル

一怪我人三人有之内一人ハ耳ヲ被切藪の内ハひろひ出し赤岩村の醫ぬい候よし

一壽之介やりのさやははづせと申聲ハ聞候もの有之よし

右横かべ村野老之話

一草津みのや市郎左衛門所にて認候姓名

御勘定奉行様方
御朱印

山田壽之介
御用人 篠原万藏

水野出羽守様
御證文御ふしん役

和田利平太
古橋新左衛門様手代
御普請役 多久官藏

出羽守様
飛騨守様
御朱印

九月十九日出立

水戸様御家中 外岡龍三郎

家來 利兵衛

九月十三日御檢屍濟

大原四郎右衛門様手代
土や茂八郎

中村 爲一郎

山本大膳様手代

逸見小野右衛門

須藤保次郎

平塚幡次郎

惣方人數七拾人程ニ有之候事

二 弘化三年丙午手録

附老中奉書 烈公答申寫

弘化三年丙午正月

銀次郎虎之介御免ニ付難有仕合 思召是迄罪人江戸へ差置候例無之候
間此度罷下り老母孝養も相成何程歟難有可奉存旨御挨拶被^{御書尤勢州殿へ} 仰遣候事

同三月九日

是迄御下屋敷へも不被爲入日夜御讀書等のミ被遊候處御出入之大名旗
本簇音樂茶事等被遊候^{勢州殿へ}苦かる間敷哉之旨御書にて被^{勢州殿へ} 仰遣候事

同廿四日

右御下向之趣一同評議仕候御連枝方を初御續之向ハ不及申上候へ共其
餘之儀ハ近來諸家客の往來も先質素なる折柄に付御三家方御場合於ハ
別^御御勘辨可有之儀ニ付同列共に於ては何共難申上先御見合御座候半
哉と評議尙右之趣を以 御内慮をも相伺候處評議候^{一先御勘辨御坐}
候方可然と被 思召候間其段可申上旨御沙汰御下屋敷へ御出之儀御謹
慎の場々御遠慮被成候儀と奉恐察候へ共此儀ハ 思召次第御越御座候
^{亦も聊懸念之儀ハ無之儀と奉存候旨勢州殿へ御請申上候事}

四月十五日

右御挨拶被仰遣候事^{御短文右様相分居候へハ御安心多用中御私事問合云々之旨}

但御副啓ニ琉球之事御苦心被遊候旨薩摩又ハ松前津輕等届書御覽被
成度旨尙又如來も功德無之哉御戯あり信州地震御噂被 仰遣候事
又御別紙ニ庶公子御平常丸御紋御服御着用にても 公邊向御構無

之哉之旨御問合ニ相成候事

四月廿三日

右御請琉球國へ模様未一向分り不申心配罷在候クナシリへ差置候夷狄長崎へ送届相濟候儀ハ未松前へ届出不申候へ共最早其内可申出と存候津輕松前へ出候届書入御覽候旨庶葵御紋之儀 尊諭之通於 公邊聊無御構儀にて御目見杯之節ハ格別御内輪之儀ハ如何様の御紋御用ひと相成候共御勝手次第と存候勿論從 公邊御沙汰可有之筋ハ決る無之思召次第と被成候様申上候事

四月廿八日

右御挨拶薩松ノヲ御指被遊候歟南北兩國内交易初り候ハ、如何にも被遊方無之旨其外夷狄之事御苦心履堅氷ニ不相成候内打拂之處置ニ相成候様粗被 仰遣候事

四月廿四日

庶公子御紋以前九郎様へ御對顔にて御覽被遊候へハの如く六角を用候處何ゆへ改候哉又醫師俗體何名何ゆ

へ御止ニ相成候哉讚州様へ御察當被 仰進候事

同廿六日

右御請御紋之儀私改候覺ハ無之又從 公邊御沙汰も無之前々御次男ハ六角御用ひゆへ九郎磨殿にも六角御付被成候事と存候旨又御醫師共之儀ハ何事も惣前々之通ニ復し候様にとの御事にも追々御復古ニ相成候處御醫師計其儘ニ相成居候ハ 公邊の御釣合も如何と一同申合前々之通ニ仕候事にも外ニ何等之存念も無御座候乍不及何事も御家の御爲又 公邊之御場合宜キ様にと奉存一同取扱罷在候へ共定る 尊慮ニ不被爲叶候御ケ條も數多可有之候間右之處ハ幾重にも 尊免之程奉希候旨讚州様へ御請被仰上候事

四月廿六日燈下との御書にて

右御挨拶被遊家爲と御思慮右様御改之儀忝存候然ル處老中間合不苦よし若有之上ハ御供ニ出候醫師の外ハ御改ニ致度御守殿附ハ以前紋所之儀

も 御目見之事も存下官紋所用させ候故常々ハ下官代用させ候紋所用候様申付候故此段御達申置候旨扱又復古之事承候處辰年以來先例ニハ覺不申儀品々書留候所數冊ニ相成候へハ面會之節一々先例御聞可申候間御合置可被下筆序ニ一二ケ條御聞申候御下ケ札可給旨被 仰進候事但本文一二ケ條トハ

- 一 兩山等御豫參御供御家老の外備後守被 召連候先例有之候哉
- 一 石見五百石役祿の先例有之候哉
- 一 丹波二男願之上別家右祿間もなく被下候先例有之候哉
- 一 彌太郎嫡子病身之者へ白銀被下候先例有之候哉
- 一 上宮寺不孝にて近院之者歸院の先例の事

四月廿八日

右御請御醫師のトハ右ハ御制度に觸云々ノト歟辰年公邊被 仰渡候趣も御坐候付大學所播摩守申合相改候事に候へは

去ル辰年當宰相殿ハ御家督被 仰出候節未御若年に付御家政向之儀三連枝家老共申合可被取計旨被 仰出候處追々御成長に付右三人共今日御免被 仰出且尊所様御事同年十一月中格別御慎深被成御坐候付別段之 思召を以御慎御宥免被 仰出候節御政事向之儀ハ御携無之様にと御沙汰之趣御連枝共へ申達置候處此度 思召之御旨も被爲在候付以來不及其儀段被 仰出候就夫宰相殿以後御心得方之義被 仰出其段委細以書付御達申候間御承知被成候義と奉存候右に付尊所様御合方之儀近來諸事別々御思慮深く被成御坐候御儀共追々御承知被遊候付分被 仰進候にハ不及事トハ被 思召候得共聊御懸念被爲在候儀を御差扣被遊候も御不本意に付無御腹臆被 仰進候其儀ハ此度宰相殿御成長に付三連枝御免にハ相成候得共未御若年ニ被成御坐候得ハ如何程御聰明ニ候共御大藩之御政務萬端御手拔無之様にハ如何可有御坐候哉尤當御家

老共儀連枝御免之上ハ別ニ精入可奉忠勤ハ勿論之事ニ可有御坐候得共御一藩之賞罰黜陟及文武御引立方等之儀ニ至り候ハ自然御相談被仰進候儀も可有御坐其節ハ厚被盡御考慮萬事ニ付宰相殿及家老共御不熟之儀を無御構御一己之御果斷等被成候儀ハ如何に候半歟可成丈寛大穩當之御所置御肝要ニハ一體年來御家臣一和之場を被失候段ハ決テ過不及之御處置無之トハ難申ニ付吳々御配慮之上御相談無御坐ハ不相成事ニ思召候將又家中黜陟等之儀ニ付ハ昨年度々御文通有之其段も委細御承知被遊候且御書中縁邊而已政府ニ揃候儀忤其節之人才により決テ無之トハ難申候へ共被仰越候趣も御尤に付既ニ其比讚岐守へ及噂候儀も有之候且又戸田銀次郎藤田虎之介等當時從公儀御沙汰之品ハ無之候得共一旦御沙汰も有之候上ハ再御登用可被成義ハ有之間敷其餘御手限ニハ嚴重禁錮被仰付候者も不少由右ハ畢竟越訴其外不輕所業も有之故被對公儀候ハ御申付候場も可有之候右ハ御家法も有之

無據御取計ニハ可有之候得共追々年數も相立候上ハ何と歟一段之御憐愍被加候ハも可然候半歟何も御差圖之儀ニハ無之候得共是ハ中山備後守へ可及噂旨御沙汰之次第も有之何分向後之儀ハ當時御用聞御家老共を始執法之向々假令如奸人と被思召候共御推察迄ニハ容易ニ御罰し被成候儀ハ却テ不穩如何様も御示教有之候ハ淳化仕候様可被成ハ勿論之儀且又有志とのミ思召候共兼テ被仰越候通案外結城寅壽の如き御目鑑を汚候様成者無之トハ難申因テハ唯々有志而已御推舉も御勘辨可有之儀ニハ兎角派黨を被立候御所置有之候ハ始終一和之期は有御坐間敷詰り御家臣たる者御家政の衰廢仕候を好み候者ハ決テ一人も無之に付幾重にも公平之御所置御急務ニハ此上上之御安心被遊候様御取計有之度思召候右御含之趣乍恐難有台慮と奉伺候間其儘奉申上候此段厚御感戴被成斯御深懇之御沙汰ニ齟齬仕候御所置無之様精々御心懸可被成候此段因御沙汰奉申上候事

三月十三日

阿部伊勢守
牧野備前守
戸田山城守
松平和泉守
松平伊賀守

鄙翰令啓述候下官事愚昧に諸事不行届去ル辰年嚴重譴責を蒙候處間もなく御宥免被仰出候のみならず昨年六月御内諭尙又此度連枝共後見御免下官事は迄政事向ニ携無之様御沙汰之處思召之御旨も被爲在候付以來不及其儀旨被仰出候段一身の面目ハ不及申祖先へ對し天下後世へ對し本意無此上忝仕合奉存候就夫家老共別而精勤可仕ハ勿論に候得共宰相事も未若年に候ハ一藩之賞罰黜陟文武引立方等相談も有之候ハ、厚致考慮一己之果斷等不致様其外家來共進退心得振

之儀御内意之趣被爲在候由にて縷々御書取を以御申聞之趣實以御懇篤之御儀不堪感激流涕之至奉存候扱御内諭之趣ハ多端に候へ共詰る所ハ御本文ニ被仰出候一藩不和等之儀聊も無之様にとの御儀別而眼目之御趣意と奉恐察候間其砌不取敢別紙草稿之通宰相方へ一書相認家中共へも相示候様申遣候事ニ候右に付ハ乍恐奉煩台慮尙又各方にも彼是御心配相懸候事ゆへ右草稿御同僚中迄相廻し候全く不取敢認候書面故事情をも不盡候得共下官の心底ハ右に而粗御分リニ可相成候間弊藩之事他日御尋も被爲在候ハ、右之振に而可然御取成頼入存候先頃本文之御禮迄夜中認御別封之御答致文略候故此段申進候不備

三月廿八日

御名

伊勢守殿
備前守殿
山城守殿

和泉守殿
伊賀守殿

以別番申進候本文御内諭之趣逐一奉承知候處就中下官近來諸事深く相
慎候趣追々入 御内聽候に付は分被 仰聞候迄も有之間敷 思召
候へ共聊御懸念被爲在候儀を御差扣被遊候も御不本意に付無御伏臈被
仰下候との儀別肝ニ徹し奉感戴候斯迄ニ 御懇之御内諭を蒙候上ハ
又愚存候趣も無伏臈不申上候ハ却恐入是故大意各方迄申進候抑朋
黨之禍追々先哲の確論も有之候事にて申迄も無之弊藩之儀も少々ツ、
其患有之候得共上より黨を分け不申候さへ下にてハ黨名を生し候事ヨ
へ下官相續以來乍不及其筋々へ種々の人物打交相用候得とも近來頻ニ
黨名を唱へ政府の所置も其人々の行狀賢愚ニ不拘是も黨彼も黨と申候
る嚴重罰を加へ候様成行其甚敷ニ至候ハ一旦逼塞等申付日數を以差
許候節又候蟄居等申付又ハ一旦隱居申付候者又候蟄居等申付其悻幼年

に兼る家督遺候者父之罪ニ依る知行召上慎申付候類又ハ 公邊御沙
汰にて蟄居被 仰付追る 御宥免被 仰出候節又々慎申付候のみなら
ず慎中隱居申付候類又ハ家中明屋敷へ揚り屋様之場所致補理蟄居之名
目にも數人押込大小并懷中物等引上物頭へ預申付候類又ハ輕き小役人
共長之暇申付其親類へ預置候類何レも源威以來於當家例も無之儀連枝
共後見中之事ヨへ其意味得と承不申候へ共先ハ何レも右之黨と申事を
惡み候餘り新法之所置ニ至候歟と被存候右様の始末にてハ人氣彌相激
し此上一和の場合何共安心不致是迄空敷痛心のみ致居候連枝共後見と
ハ乍申誰迎も一國一家の事さへ行届兼候儀にも何程 台命を蒙候迎も
折々本家へ立入世話行届候筈無之先ハ當家老等より申立ニ任せ候事に
候へハ前文不平の所置ハ全く家老等之不行届ニ有之右家老等之内にも
別る人和を失ひ候者相見候故追々申進候次第も有之候得キ然處此度不
存寄 台諭を蒙り宰相を賞罰等相談も可有之候ニ付ハ第一右不平の

處置を改正不致候もハ相當不致候間表向罪名無之内實黨名にも咎又ハ
 下轉等申付候類ハ夫々如元召使役人共別も不行届之分相當の咎振申付
 候も可然哉と致愚慮候得共 御内諭之趣此間中日夜拜見得と致思慮候
 に物事廉立候義ハ又人氣を激し候氣味有之且役人共へ咎申付候へハ何
 歟連枝共へ當り候様相成左候もハ折角從 公邊時服拜領にて御免被
 仰出候廉ニも相障り即ち 御内諭ニ有之候通不及候場ニ陥り候も難計
 重々恐入候間諸事悉く 御内諭之通相心得一旦從 公邊御沙汰御坐候
 者再登用不仕儀ハ勿論役人共一二不行届と兼も致鑑定候分も罰ハ不相
 加先是迄之通爲相勤全く御申聞之通禁錮之者ハ數年も立候間可然憐愍
 を相加候方と致評議候積に御坐候乍併前文之通り源威以來先例も無之
 不平之所置等此儘にハ長く打捨候もハ又一藩熟和之目當無之候間得
 と人氣定り候上にハ當分下博等致居候者之内にも故障無之分ハ得と人
 物相撰置自然欠席等へ召使ひ又禁錮隱居等にて其當人差障有之分ハ其

子孫召遣ひ傳來之知行等ハ追々相復し且又當時之役人共可相成丈ハ居
 置只其一二不行届之者ハ追も其家筋ニ寄相應之立場へ轉役申付全く政
 事方相除き候迄ニ取計兎も角も派黨を分ク候事を相止公平寛大にて
 公邊御徳化を押弘候所置專一ニいたし 御懇之盛意と奉報候心得に候
 下官心底ハ右之通にて無他事候得共此節備後始役人共嘸恐怖致居候半
 故 御内意を経候事も有之候ハ、可然御教諭ニ致度且又前文之内下官
 心得如何之事も有之候ハ、尙又無御伏臆御直言ニ致度何分頼入存候也

三月廿八日

御 名

- 伊 勢 守 殿
- 備 前 守 殿
- 山 城 守 殿
- 和 泉 守 殿
- 伊 賀 守 殿
- 殿 參

二白下官退隱政事ニ不拘様被 仰出候に付其砌より風聞并上書建白
不承候處以來相談致候様蒙 仰上ハ以前ニ通承り不申ハ眞偽正邪
相分兼相談も出来兼候故以前ニ通り承候儀申進候迄にも不及候へ共
乍序申進候也若否^{諾カ}ニ御儀も有之候ハ、尙又御申聞ニ致度候事

宰相遣候下書扣 御返しニ不及

我等事淺見寡聞ハ勿論人情時勢を斟酌致候事不得年ニ天下國家ニ
御爲と存詰候へハ過不及の所置有之候にも不心付候故去辰年從 公
邊容易ならざる譴責を蒙候段實以恐入候儀申迄も無之候不幸不明ニ
廉ニ罪を得候ハ我等愚昧にてハ當然に候へ共萬一野心にて有之
様國持大名等より被疑候様にてハ 威義二公以來代々相傳の赤心水
の泡と相成可申ハ勿論 公邊の御爲如何可有之哉と是のみ致痛心候
處一ヶ年にも不滿重キ慎御宥免ニ相成候のみならず去六月尙又此度
追々 御懇の 台諭を蒙り一身の面目ハ不及申先君之靈へ對るも御

申譯有之感銘無此上其許にも御悅可給其許にも追々成長被致殊此度
篤キ 台諭をも蒙候上ハ定心得振有之事とハ存候へ共此上一藩不
和等ニ儀無之様にとの儀眼目たるべく存候我等淺見にハ候へ共幼年
ハ經書通鑑等にて考候に朋黨と云事ハ國家の大患にて其人々の行狀
に不拘是も黨彼も黨といひて罪名もなく人を罰し候様成行候へハ必
國家の大害を生し末ハ危亡にも至候事歴々として確證有之候辰年我
等退隱以後ニ事情朋黨の患無之とも難申自然 台慮をも奉煩候義重
々恐入候事に候間此處第一ニ御心得假初にも同じ家中ハ名目を付候
事無之様致度事ニ候我等退隱と噂キ候餘り過激の説を建候人も可
有之又過激の説を建人心を動候様にてハ第一 公邊へ對し不相濟候
迎類ニ右過激の説を惡み候人も可有之處我等父子の爲を存候ハ家の
爲を存候故ニ可有之家の爲を存候ハ我等父子の爲を存候故ニ可有之
我等父子の身に取候ハ何れも同じ家中の事にて一體に候得ハ倫理

を失ひ士道ニ背き候罪狀の外ハ何分公平寛宥に處置致度事ニ候扱又家中を教育いたし候ハ文武二道の外無之候處其許にて文武出精被致候へハ家中も勸めずして勵み可申何分御弓斷有之間敷其外追々可申進候得共先肝要の事のみ相認候我等事ハ敗軍の將同様ゆへ右等之事申も如何に候へ共三折臂爲良醫と申事も有之候故厚顔をも不顧申進候也

三月十五日

景山

宰相殿參

本文之趣くれくも得と御心得尙又早速江戸水戸家中へも爲御見可給候也

三 東藩天保月表

「文政十一年十一月十二月
自天保元年庚寅正月
至同十五年甲辰五月」

文政十二年十一月〇三日葬 先君哀公

去月廿五日有 命特許 居喪及蒙罪屏居者出拜 靈柩於道
二十日 公襲封

榊原淡州 居八石被
下八石被
岡崎平兵衛
同采女へ
千三百石被
下千三百石被
但先是榊
原本千石
石岡崎ハ
新九郎采
女ハ何レ
モ寄合差
引保伊元
大久保請
佐小普請
二入奉行
勤定奉行
居幸衛門
門幸衛門
賜土藏大
田要人勤
奉行ヨリ
番ニ轉シ
奥

同年十二月〇九日發令禁大夫士慶事張宴會客及交際過度〇十一日以市川市平小山田軍平幡鎌與衛門多田傳衛門爲側右筆□□防於此是日以櫻井小三郎爲勘定奉行以今井萬吉爲馬廻萬吉者長藏之叔父先是以遊倅事公於龜間〇十四日赤林八郎左衛門免執政爲表家老〇十六日改賄方爲臺所〇十八日 公加元服賜 大將軍二名之一字是日拜從三位任中將〇十九日以野中三郎岡部忠藏爲執政〇二十四日執政榊原淡州岡崎平兵衛及關十兵衛別所左兵衛大久保今助等蒙罰有差
貞享以來士人往來於江戸者限以三日其旅舍亦有定所是年有令以二日若一日往來在所不禁其旅舍不必某々驛但禁泊於千住驛耳
天保元年庚寅正月〇十六日禁士大夫家彈俗箏及三絃彈樂箏於殿中及上平兵衛家不在斯限平兵衛は世以
爲雅樂 下 親筆於士大夫勵文武又開言路使人々上封事〇十八日以執政與

右筆頭取別役
所左召放
儀七人行扶持
シ人扶持
ヲ賜入遠慮
命ニセラレ
大關次郎普
門奥右筆頭
取組水小源
請加藤辰
衛門井出
三郎皆小
庄八郎皆
普但組原
移水戸ニ下

津長州爲定府江戶執政○二十四日命去歲十月不請而至江戶者四十餘逼
塞山野邊戸田三木跡部皆罷職是日以參政朝比奈彌太郎爲水戸執政命野
三五郎定府
同年二月○二日以酒井市之允爲勘定奉行赤林三郎兵衛致仕郡宰吉村梶書
記魁富岡等罷以井上次郎大夫爲書記魁○五日以渡邊半介爲側用人○六
日禁邸中稻魂祠祭日歌舞譁呼傲市井之態○十五日以額田久兵衛爲參政
以與津藏人爲寺社奉行○十八日停側右筆職○二十七日移江館於水戸總
裁及編脩大抵移水戸留者管文庫耳
同三月○四日以山國喜八郎爲目附以田丸友部爲郡奉行○五日以執政鈴木
石見守重矩爲水戸城代○九日以參政中村與一左衛門爲執政命岡部忠藏
定府○十四日以原田善衛門成裕爲與右筆命酒井市之允定府○廿七日禁
嫁娶以金爲贈○是月令諸官府曰凡商賣隸於官府或給月俸或許用徽號所
謂御用達者苟有可沙汰宜具申其狀

同閏月○二十四日額田久兵衛罷貶郡奉行高橋彦大夫寺社役里見平次郎爲
小普請○二十九日山野邊義觀爲執政見習戸田江戶通事三木跡部復使番
同四月○四日定士大夫家端午節兒童旗幟之制○四日以河津安介爲寺社役
○九日以增子幸八郎爲書院番○二十四日以小普請川瀨小納戸山口頼母
爲郡奉行○二十五日戸田發水戸○二十九日以會澤藤田吉成爲郡宰至是
郡宰悉變易○廿九日以立原任爲先手物頭
同五月○九日先是士人家有疾病者必乞於官得愈允而然後在家看病自今以
後父母若妻及嫡子疾病則直歸家看護但可申其狀於官
此令水戸亦同凡命令涉江水者書之於一方
○日欠每月十一日招支封之君與講經於中奥有司及近臣亦輪講以爲例○
十三日許殿中着所謂小倉織單袴不必拘時節○十九日目附栗田八郎兵衛
衛轉職以萩助衛門爲與右筆○二十九日以小徒目付組頭山中五郎兵衛
爲馬廻

同六月○四日罷郡小吏貪賂汚行者以町與力照治爲郡方勤○日欠減所謂御用達町人者之月俸○十六日目附使番先手物頭賜馬○十七日賜馬於先鋒行人監察三職爾來勿有不畜馬○二十一日停中山氏采地稱別高○二十四日止中山備州采地稱別高稱知行所

同七月○朔命國老以每月五日閱諸士武技○二日有卑官之命時丁亥江邸罹災之後設假殿於臺至是方營本殿○九日倉奉行三輪友衛門罷爲小普請○十九日以跡部爲目附鈴木庄藏與右筆井坂久左勘定奉行石川總三郎小十人目付組頭杉山忠亮寺社役三村善兵衛藏奉行

同八月○六日令曰凡士大夫有罪賜暇者其子弟苟能勵行以文學武技著者許復仕雖其所放逐者之子弟亦准之○九日以來三木庸之介則爲目附○廿四日買物神長甚兵衛塙十衛門罷以小國新三郎代之

同九月○廿一日令士大夫着木綿服貯武器○廿九日擢小普請石川勝藏建邦久保田林太郎知崇金子孫三郎教孝爲小監察

同十月○二日命山野邊大夫父子定府○六日山邊義觀賜千五百石執政見習如故○九日以目附安藤豐島爲先手物頭○十四日以山中五郎兵衛爲普請奉行○十八日石川久保田金子三小監赴江戶○十九日郡宰川瀨吉成藤田會澤應 召赴江邸○二十三日郡宰拜謁○晦山邊父子發途

同十一月○六日青山延千川口長孺罷總裁爲書院番以青山延光攝總裁事以根本三十郎爲小十人以飛田勝太郎爲步士館職如故○十四日四郡宰歸水戶○十九日以井上次郎大夫小納戶

同十二月○朔 公任參議○三日山國喜八郎至於江戶○十六日家督以上之士死雖爲義子賜俸祿○十九日以岡見甚內爲目附○下節儉之令○廿一日禁士人貸子金○是年停中山氏采地稱別高更稱中山某知行所

天保二年辛卯正月○十一日以山邊義觀爲執政 是日令家督以下士死者增月俸○十一日以友部爲江戶調役會澤水戶調役田丸勘定奉行小田與三郎役金奉行坂場彦助寺社役杉山復館職○酒井平衛門海防指引山口目附○

復四郡以石河德五郎爲郡宰與川藤吉同職

同二月○四日禁上已節兒女所玩偶人奢侈無度者務從省約○十八日以飯田

總藏爲用人鴨志田傳五郎小十人目附組頭

同三月○十五日鹵簿所用挾箱及篋箱始用栗色纏以紫紐從尾紀二藩約束

也此條前年力不詳○十九日舉藤田主書家臣大胡丹藏爲町與力○廿九日以平尾

出羽次郎爲先手物頭

同四月○四日以目附三木之則爲小姓頭○日欠夫人登美宮歸於我

同五月○二日歷代夫人一用諡號先是諡號法號並用○廿四日以中山壽平爲目

附

同六月○廿四日以尾羽平藏爲奧右筆

同七月○七日申惡衣服及婦人奩具屢履務從儉素之令○九日以河津安介爲

奧右筆頭取

同八月○六日命岡部忠藏移水戶賜佩刀○十五日野村喜左自盡

同十月○廿九日會澤安罷爲史館總裁鈴木原田萩三書記爲馬廻廢脩文獻志

岡崎正忠沒

同十一月○四日以山口頼母爲御用調役班先手物頭之上○十九日以住谷長

太夫飯島彦八郎爲書記

同十二月○十四日興津長州罷爲表家老移水戶○廿五日以先鋒平尾爲目附

天保三年壬辰二月○十五日書記深澤甚五兵衛罷爲小普請組以白石又衛門

爲勘定奉行見習山中市郎衛門郡奉行見習○彪移病不出○二十九日以興

津克廣爲定府小姓頭克廣長州克邁之子也

同三月○十八日田獵勝倉通事戶田忠敵奉內命來視

同四月○九日以飛田勝塙勝文爲文爲小十人館職如故

同五月○三日用人飯田惣藏沒○四日始令處士佐藤捨藏名坦講經於小石川史

館○九日宮本尙一郎班鄉士堀川潛藏允帶刀稱氏褒松平氏家臣小田野權

之介賜金若干○十一日有命召川瀬石河於江邸十五日發水戶○日欠幕

府傳 詔追贈義公大納言從二位○廿九日會澤安班通事賜百五十石鈴木為郡宰青山延于水戶通事彪江戶通事

同六月○三日世子生○五日以遠山龍介為用人名越十藏政敏為世子抱傳

同七月○十六日以側用人渡邊半介為執政班大番頭之上○廿一日以白石又

衛門為水戶御用調役原田江戶寺社役目附跡部寄合差引是日佐藤政之允

賜暇

同八月○九日以大久保甚五左衛門為側用人與鶴殿同職○廿四日以山國為

通事石川惣馬廻○廿九日以興津藏人為參政佐藤主稅寺社奉行先是寺社藤田繁藏

目附

同九月○九日有 公就藩之命○十二日烈風暴雨 小監察濱野熊五郎久保

田林太郎高久源吾名越平藏七人罷為小普請組○廿六日以小姓頭岡島藤

左衛門為用人○廿九日以跡部為江戶小姓頭

同十月○九日三木之則罷為中寄合○十四日以有賀喜衛門重將為與右筆

二日火之見
大屋に始て
倉に用ハ
鼓ハハ
駒込ハ
火大ハ
ツ火大ハ
様其外
連枝外
山井上
野中御

等御人數
出候節
揚一ツ
御近火同
揚八町四
ハ左記之
通リ板二
角板二ツ
揚柏子木
早鐘も
鎮之通リ
是迄之通

○十五日令士人出境者齋介冑及槍○廿五日以通事小松崎權平久重為世子抱傳

同十一月○十六日執政岡部致仕川瀬為二條公夫人小傳井坂久左書院番芦

澤總兵進物番頭

同十二月○九日以山中市郎衛門為松岡郡宰移吉成為南郡宰安食七兵衛勘

定奉行○廿八日有令 使武技教授以漸合并教場 又禁庶人講武命五百

石以上常蓄馬諸士備武器

天保四年癸巳二月○二十三日瑛想夫人到水戶

同三月○二日 公發江邸○五日就 藩○六日臨史館獎勵諸生賜宴○廿一

日遊寅賓閣○廿六日歸城○廿八日獵於勝倉

同四月○朔親臨史館聽諸生講經賜宴○十一日詣村松○廿三日遊蒜湖史臣

扈從○廿七日士人子弟謁見

同五月○朔臨史館賜宴○十一日遊寅賓閣○十四日歸城○十五日有令 東

照宮祭日規式以上得拜 神廟○廿七日又遊寅賓閣

同六月○二日獵於丹下○六日以萩助衛門爲普請奉行○十日詣吉田神社○十五日詣八幡神社 時冷氣如八九月 公潔齋七日○廿六日詣村松祠祈年○廿七日遊東海

同七月○朔 公還自寅賓閣臨史館賜宴○二日遊湊村○五日歸城○十日目附平尾復先手物頭○十五日賜宴於史臣於寅賓閣○廿四日令武藝教授熟議合併教場

同八月○朔大風關左尤甚 邸中後樂園老樹折者不可勝數士人官舍破損甚多○朔大風拔樹發屋○廿一日巡視北海諸村○廿九日歸城

同九月○朔 臨史館

同十月○朔 臨史館賜宴○九日禁火葬○十六日用人岡島沒

同十一月○六日書記魁河津爲役金奉行○九日以興津克廣爲用人○十八日二郎鷹君生

六日女髮結
御屋敷へ招
御制禁
候儀

同十二月○朔 臨史館賜宴○三日獵於三和村○六日女髮結御屋敷へ招キ

爲結候儀御制禁○七日特命佐藤政之允復爲父權內嫡子○八日獵於檜木山及小吹村○廿五日以小姓中村紋四郎爲目附執政中村淑穆之子也

天保五年甲子正月○元日士大夫登城慶賀布衣以上賜盃又賜餘瀝於諸士

同二月○十一日邸中金田士人舍失火延燒金田揚地御厩前大下水端御殿前五十軒之舍又延燒臺所及勘定所大納戸方矢倉方金方買物等之廳及切手門南北之舍 公宮無事○廿四日臨史館賞浪華梅賜宴○廿八日獵于馬渡山

同三月○三日召老人於 城觀舞樂○十六日巡視南郡○廿三日歸城○廿七日巡視北郡

同四月○八日歸自北郡○九日觀 武射○十一日獵清水原○十二日遊寅賓閣○十三日歸城○十八日以橫山兵馬爲江戶先鋒○廿三日公駕發水戸○廿七日公參府

同七月○十七日以藤田主書貞正爲執政

同八月○六日二郎鷹君夭

同十一月○六日以宮本左一郎爲與力隸山野邊氏

天保六年乙未四月○朔 高須源大夫榮清暴病沒○廿四日以郡宰山中爲書

院番○廿六日夷船見於東海

同五月○朔 夷船見于北海○廿三日三郎鷹君生 是歲大塔宮亦五百年亦

有詠歌○廿五日楠公五百年公有詠歌

同六月○四日以原主一郎爲目附○二十二日郡宰石河罷爲小普請參政以下

譴責有差先是石河捕越後亡命民金八者於越後訊其殺人金八不服除而詰

之金八係溝口氏所部之民未脫戶籍者乃申之於 幕府事觸三尺石河因廢

云

同七月○三日令讚藩老臣以每年正月謁見 先是支封老臣皆以正月謁見獨讚藩老臣不見 ○十九日以

寺社役海野泉藏爲武茂郡宰

同八月○三日大將軍饗 公於濱御殿○十四日以山下伊左衛門爲使役賜職

田五十石根本松壽增賜俸金○十六日以戶田爲側用人見習班用人桑原猶

衛門致仕子幾太郎信毅爲大番先是桑原在京師以津川伊大夫爲二條公夫人

小傅○廿四日以生駒萩衛門爲勘定奉行○廿九日以矢倉奉行橫山長三郎

爲寺社役

同九月○九日以粟田八郎兵衛爲二條公夫人傅班小姓頭○廿八日立原任醉

罵有司於 公前

同十月○十一日大赦河方神長塙等嘗免者各就官

同十一月請以目白邸易駒込小笠原信州邸 幕府允之 公本有賜邸中士人

墓地於駒込新邸之志不果○四日目附加治左馬助罷爲留守居物頭以藏奉

行薄井十兵衛爲矢倉奉行○廿四日二郎鷹君生

同十二月○五日以井上甚三郎栗田信衛門爲世子通事○十五日以佐野勘兵

衛爲目附渡邊伊衛先鋒吉川兵藏倉奉行○十七日松平源藏父子木内六衛

門等閉門堀口助衛門賜暇○廿四日山口賜五十石通前二百石橫屋成瀬等
逼塞○廣常磐原士人墓地

天保七年丙申正月○元日 公移病不登營○七日不登營○十一日執政中村
賜職田二百石大田十郎左衛門賜足目五十石町奉行中山賜五十石町奉行
中山賜五十石通前二百五十石海防指引酒井平衛門佐野七郎兵衛轉職酒
井通事佐野小納戸以先鋒安藤平尾出戌海邊築砦於友部平尾移焉又築於
大沼安藤移焉以大關恒衛門爲海防役移磯濱使步卒各二十人土着友部及
大沼郡宰吉成賜足目五十石○召執政藤田調役白石於江戶十六日白石上
途十七日藤田上途○十五日 公登營大減鹵簿之數諸士以上扈從者皆使荷
槍○廿六日命野中移水戸賜國宗刀○廿七日令諸官府痛省冗費限以十年凡
有意見越職言之亦許之○廿八日命藤田主書永居江邸翌日賜職田三百石
同二月○二日增子淑茂沒年七十○五日瑛想夫人發江戶○八日瑛想夫人到
自江戶自是居水戸○十九日以小姓頭久貝爲土藏番頭以目附中山爲小姓

頭持頭橫山甚左槍奉行矢倉奉行小原金奉行大田斧次郎小十人目付里見
宗三郎小監察渡邊德之允與力

同三月○十九日以執政朝比奈爲城代○廿四日買物役小國新三郎石川忠次
爲土藏番以矢野唯之允爲勘定吟味役以勘定鈴木次郎左爲徒列○廿八
日使執政有司交代於江戶是日櫻井小三郎致仕○廿九日江邸士人命徒水
戸者百餘人舉邸震駭停定府之名以立原任西丸御城附○廿九日森新左衛
門閉門五百城縫殿介遠慮

同四月○朔有命使執政及有司交代於江戶

同五月○七日執政亞卿山野邊義質致仕義觀襲祿萬石土着助川村爲海防總
司○十四日用人渡邊笑兵衛出爲馬廻頭以使番松原彌一衛門爲目附○廿
四日以先鋒近藤三八郎爲持弓頭岡本忠衛門矢倉奉行莊司健齋入館

同七月○二日山邊義觀歸水戸

同八月○十三日郡宰鈴木海野應 召至江戶○十九日郡宰謁見○廿九日以

鵜殿廣生爲執政戶田爲側用人本席

同九月○十日賜新徒水戶者宅地○日欠目附藤田彌衛門沒○十九日以使者
番近藤次郎左衛門爲目附

同十月○三日以跡部爲用人立原小姓頭川瀨勘定奉行原喜內鷹司公夫人用
人柏介衛門江戶金奉行橫山忠兵衛西丸御城附○十一日以町奉行小宮山
次郎衛門側用人以友部正介目附

同十一月○廿日以原田爲奧右筆頭取小幡又五郎寺社役今井萬吉次番○廿
九日以淺利九左爲御守殿御用人

同十二月○三日山野邊移於助川○廿五日以酒井市之允爲先手物頭人見金
之介江戶先手物頭石川勝藏吟味役○廿五日以先鋒豐島源八郎爲町奉行
河方作左爲槍奉行

天保八年丁酉二月○十二日公親撰甲拜東照宮遺物於涵德亭又使士大夫各
介胄謁見每年爲恒例○廿四日以吟味役矢野唯爲奧右筆

同四月○廿八日夜南郭松平氏第災

同五月○五日以普請奉行矢倉奉行藏奉行屬若年寄三職本屬用人以江戶寺
社役遙屬水戶寺社奉行江戶寺社役本屬若年寄○五日以目附佐治七衛門爲先
手物頭看奉行矢嶋津大夫勘定吟味役○廿三日公子三郎君天

同七月○七日石川久徵沒八十二○十九日以先鋒近藤爲目附○廿七日夜大
工町泉町火

同八月○四日以小監察市毛谷衛門爲看奉行○廿三日公任中納言○廿六日
中山備州至水戶○廿七日以石河幹忠爲大番

同九月○二日將軍 宣下○六日命松平將監土着長倉村○十四日吉田令世
再入館○十八日川瀨至江戶○二十三日眞田豆州又詣藩邸

同十月○十四日坂場彦介沒四十五○二十七日川瀨至水戶
同十一月○十六日原田歸水戶○廿四日以深澤爲寺社役薄井十兵衛爲勘定
吟味役

同十二月○七日川瀨赴江戸
天保九年戊戌正月○十一日以新番鈴木藤三郎爲吟味役○十九日合併勘定吟味役及吟味役單稱吟味役以勝手懸分常輪分之以加藤駒次郎爲吟味役
同二月○九日饗紀公於小梅別墅○十二日介冑謁見百十八人
同三月○朔 大祥寺火○四日以安藤内匠爲持頭上座海防仍舊萬澤持頭前木使番小林次郎太郎致任子進太郎嗣○六日以久貝爲御守殿御用人○十日西丸災 公登城候起居
同四月○朔 彪至水戸○二日川瀨歸水戸○廿一日以金子孫三郎爲奧右筆使番三好右衛門八森與左衛門罷幽根本五郎左衛門于先鋒酒井宅
同閏月○二日彪自水戸○四日以美濃部又三郎爲先鋒以管庫久保田爲江戸右筆○十五日以步士濱野高野等永徙江戸
同五月○二日川瀨沒六十二○四日以深澤爲勘定奉行○五日置床几廻八十八餘人通江戸凡百騎○五日選諸士長子十餘人爲牀凡廻江水凡百人分爲四

隊一隊曰須二曰美三曰也四曰加取諸速之義也○廿九日令邸廐所養之馬唯取適實用勿拘毛皮禁忌但獻於幕府者不在此限

同六月○十四日以小姓結城寅壽爲使番大關幸之進寺社役小關宗内吟味役丹虎次郎管庫

同七月○晦日以石川勝藏爲奧右筆

同八月○十日公子六郎君夭

同十月○十五日中村執政歸水戸是日召 救荒富民數百人於城中賜酒及物○十六日以參政與津藏人爲大寄合頭以大久保甚五左衛門爲參政○十七日十八日廿日召 救荒士民賜酒及物

同十一月○十三日宮本左一郎沒六十一○十四日以郡宰海野爲賢姬君傳以書記金子孫二郁爲郡宰寺社役横山甚七郎爲書院番新番組頭石川總爲寺社役書記魁松崎新八郎爲矢倉奉行○十七日新家惣十郎鈴木宗與等放逐鈴木鐘吉蟄居○廿一日世子少傳名越致仕以小姓頭取多田傳衛門次盈

代焉班位仍舊

同十二月○七日小宮山昌秀致仕○十一日先是邸中講武之場散在各又不設屋唯以籬爲區每天雨廢講技 公新設演武場於崖下弓馬刀槍各分區授之用人武田彥九郎督其事是日告成水戶弘道之館實基於此○十二日賜宴於崖下演武場○廿二日命藤田彪掌檢地事○廿五日戶田忠敵班馬廻頭之上彪班槍奉行之次賜足目五十石

天保十年己亥二月○十四日以用人山田六郎衛門爲御守殿御用人

同四月○廿六日以町興力高倉助衛門爲郡方勤○廿九日發正經界之命

同五月○六日四郡幸巡村 是日松平將監赴江戶以宍戶侯哀也○十七日幕府有命執大内清衛門令先鋒佐治七衛門護之於宅○廿三日清衛門至江戶

○廿八日以小納今井爲勘定奉行○廿九日佐久間貞介等八人郡方出役

同六月○六日此條水戸ニ係ルベシ以松平將監氏歸襲宍戶侯後特命翠翁氏庶孫申之介承松平氏

之緒賜三千石班從五位下大夫之後

繩奉行三十
三人
吉村藏吉
乙部吉兵衛
經島伊左衛
門藤安兵衛
後藤村左衛
岡村太左衛
津川伊平太
山内多仲
渡邊織部
横山經藏
芳賀庄兵衛
井出彌八郎
西井市郎衛
土井市郎衛
門田理介
村田彦三郎
櫻井三郎衛
太田五郎衛
逸見儀左衛

同七月○四日以船大將大田十郎左衛門爲用人以目附佐野代之以安島彌次

郎多賀谷鐵三郎爲郡宰見習是日伊藤十藏深澤奎賜暇

同八月○十七日以先鋒人見爲目附

同九月○六日金奉行長尾介五郎小原忠次郎逼塞以官金紛失也○廿四日小

宮山楓軒等以垂統大記賜褒金小宮山白銀十五枚以小十人目附吉村新三郎

爲與右筆和田美太郎小十人目付以桑原幾太郎掌軍用事○廿九日以吉村

藏吉高久源吾等三十二人爲繩奉行

同十月○十日九郎磨君生○二十四日以川瀬隼太岡田佐次衛門渡井小四郎

爲普請奉行山中五郎兵衛爲馬廻組頭

同十一月○廿四日執政藤田貞正致仕以戶田武田先是跡部彥九郎復本姓武田爲參政以勘定

奉行今井爲用人藤田彪罷爲史館編修○廿七日執政中村致仕子紋四郎寄

合差引參政大森免職近藤執政小山伊藤減祿致仕額田岡崎奪祿致仕給三

十口俸山口留守物頭白石書院番以大場肥田爲大番頭大田原亦再爲大番

國分五郎藏
永田源十郎
市川龍介
田丸安之丞
中山兵内匠
城所政三郎
佐々源三郎
岡本平九郎
小野瀬鴻太郎
床井彦大夫
高谷部雲八
高久源吾

頭三木書院番頭石川總書記魁尾羽寺社役桑原郡宰會澤清小納戸
同十二月○九日以小姓谷佐々衛門爲勘定奉行書記小田部長八郎爲魁○十
二日小山田軍平用人龜井宇八小監察與津克廣襲父祿爲執政○十二日與
津長州致仕以會澤杉山青山幹學校事○十五日參政武田歸水戸○十九日
以用人遠山爲進物番頭以會計生駒荻衛門小納戸書記住谷小監組頭書院
番太田彦兵棍八内津田彌兵馬廻○廿四日秋山村衛門佐々木政衛門增子
小作賜暇山本秀五郎放逐水庭源衛閉門小笠原斧吉宮寺萬衛等逼塞○廿
五日與津執政歸水戸飛田勝馬廻高根千十人○是月彪命掌學校之事
天保十一年庚子正月○十一日以藤田彪爲側用人班用人之上今村喜左用人
小納戸淺沼四郎八郎勘定奉行小監新家半之允與右筆○十一日致仕藤田
中村賜月俸大森大番頭寛新番頭萩庄左馬廻頭結城小姓頭近藤次郎左用
人小原忠次郎山中市郎衛門通事侍諸公子山口世子傳白石安戸侯傳相石
河安嶋勘定奉行秋山豐之助宇留野庄次郎徒目付次座○十五日公登營賜

暇之儀如例鶴殿平七番頭三木及彪謁 幕府二公○廿三日公駕發江戶○
廿四日幕府夫人薨夫人我登美宮夫人之姉也○廿五日就藩○廿六日臨史
館賜宴是日有岡崎額田之罪賜岡崎東之助五百石額田但馬三百石其他墊
居者皆免以外岡豐之允爲小普請組
同二月○朔 臨館○十二日召諸子弟有文武材藝者試之○十五日遊賓寅閣
○二十日執政野中致仕
同三月○朔 臨史館○二日以馬場祐介坂場熊吉爲小監察吉川甚五郎爲吟
味役矢倉方勤永井十左衛門藏方勤史館編修秋山彌九郎土藏番以沈橫山
善四郎吟味役○四日命杉山忠亮祇役于江戶侍讀世子○十二日諸士介胃
謁見於本城○廿二日諸士介胃蒐於千束原○廿四日公遊湊
同四月○四日公臨武田彦九郎宅之擊劍場又臨長尾劍場○九日以杉山忠亮
爲弘道館教授賜職田五十石○九日以青山延于會澤安爲弘道館教授頭取
以青山延光爲教授○十七日東照宮祭儀令持頭介胃騎馬先是唯步卒介胃

同五月○二日夜小石川公宮火 峯壽夫人宮無事○四日世子移駒込○廿二日以大番頭大森爲大寄合頭雜賀孫市爲小姓頭榊原大番頭榎本書院頭西鄉監物爲土藏番頭兼掌大廟事大井助衛門徒頭梶又左衛門友部村先鋒名越平藏奉行木祐衛門門勘定役見習班徒列佐久間貞介爲宍戶侯元締役班徒士列

同七月○九日以小納戶井上次郎大夫爲小姓頭取鯉淵恒太郎普請奉行間田介九郎爲大番岡村太左衛門經鳥伊左衛門勘定奉行○十四日以下那珂西村孝子音藏爲持同心○十四日立原朴二郎家督安藤奎進中與番與右筆飯島彥八郎新番組頭與右筆平松茂介右筆組頭班代官林清衛門杉山熊藏右筆組頭豐田又之介厩別當武名仲徒目附○廿二日世子移小石川以史館爲假宮

同八月○日欠以寺社役尾羽平藏爲小監組頭○五日以西丸御城村橫山爲小姓頭以先鋒岡島藤左代之少傅小松崎致仕以杉山忠亮代之小松崎孫兵衛

小姓頭取吟味大木與衛門小姓頭取定御供小林多一郎小十人○十日以町奉行中山庄司左衛門爲江戶與番頭○十三日賜國分強介三人俸以金子健四郎爲與力隸武田彥九郎肥田寅吉生井幾衛門小普請組○廿一日以參政大久保爲執政小姓山田嘉市郎小姓頭取○廿一日以參政戶田爲執政會計安島小姓頭取次番菊池善左福地政次郎小納戶小監立花源六書記 是日以宇都宮小山等之宅爲疊舍地別賜宅及金

同九月○四日以書記塙清之允爲小梅藏奉行○十三日夜命史臣泛舟於蒜湖賞月○十五日改郡廳稱呼松岡爲東武茂爲西太田爲北但南用舊名○廿四日停常磐坂戶墓所做佛法用法號碑面及捧佛燈等

同十月○二十日以布施十衛門爲江戶使番以內藤市松與右筆○二十四日目付今井新平免職爲中寄合以閨門不肅也○廿九日以小十人增子丑三郎爲次番命御前勤

同十一月○六日小山宇都宮鳥居等爲小姓小姓頭取井上甚三郎小普請觸頭

小十人石川嘉大夫馬廻館職仍舊小監宇佐美平五郎小十人目附○十一日
借金之令與江戸同○十一日恩命諸士所借於公室金穀一切棄捐又命捐
其私相貸借者之半爾來子錢之息勿過什一

同十二月○三日致仕亞卿山野邊常德齋沒年六十○十七日以近藤大夫爲世
子傳○廿五日進藏奉行班置於運送奉行之上○廿九日近義至水戶

天保十二年辛丑閏月○五日以番頭天野伊豆爲參政以持頭村上源五郎目附

○七日大御所危篤○晦 大御所薨諡文恭院

同三月○四日虜船見干東海當係四月○廿五日以勘定奉行田丸稻之衛門爲留守

居物頭小姓頭取興津勝五郎目附當係四月

同四月○廿日命參政結城側用人彪用人小山田今井定量入爲出之法書記魁

原田矢野亦有其命

同五月○二十九日有大除目合進物番於馬廻爲五隊每隊二十人沙汰醫官馬
乘等廢中山氏組附先是大番一隊十三人爾來爲二十人 以根本五六郎安

松七郎兵衛飛田勝太郎爲弘道館教授次番吉田平太郎亦以次番爲歌道懸
高根村田豐田秋山國友莊司鈴木石河鐵次郎青山量四郎等入館○是日賜
二百石於三木仙之介爲中寄合賜月俸於秋山彥五郎爲小普請共有思祖先
之功之命

同六月○二日以杉山亮兼弘道館教授塙勝文助教授檜山源太郎爲算學懸以
內藤右膳爲馬廻頭以處士千葉周作爲馬廻賜百石廢進物番合於馬廻○九
日以宇留野弘爲訓導班右筆去月廿九日 弘在妻喪與高根等同職○是日增楊友的篠本
玄生月俸此二人在去月廿九日被沙汰中而頗勵其業故有是命○十五日以
俸米二十石俸金二十兩爲百石二十石二十兩以上爲百十五石或百三十石
是日進國中寄騎鄉士於譜代席班步士目附及步士於謁見之席○十五日以
俸米二十石俸金二十兩爲百石踰二十石以上者爲百十五石或三十石 持
頭酒泉彥大夫致仕子新三郎大番 沙汰能役者各有差
同七月○公以去年正月就國今春宜參 府嘗更乞一年留於國 幕府既允

之至是

幕府許 公更五六年間在藩其辭命有云 大將軍聞 公正經界興學校
欲 公久在國親從其政故有是特 命蓋水野越州等憚 公陽寵之陰遠
之也

公嘗請蓄前髮於幕府々々允之○晦以小野角衛門爲御守殿物頭以塙勝文
爲次番 此條當係六月

同八月○朔弘道館開館會者蓋三千餘人云○十八日以書院番頭赤林大番頭
岡部忠平馬廻頭加藤四郎衛新番頭奧津勝五小姓頭大森茂二郎旗奉行久
木七郎衛持弓頭內藤彌太夫先鋒河方作左寄合指引高橋太郎左馬廻組頭
大關次郎衛新番組頭○廿九日執政鶴殿罷大傳爲水戶勤其長子友太郎免
職復惣領普請奉行薄井倉奉行○廿九日執政大久保參政天野命永詰限以
三年

同九月○廿八日執政鶴殿歸水戶

同十月○朔武田彦九郎歸水戶天野代之○二日大久保執政至自水戶○十日
以小姓岡野庄五郎稻葉算太郎小納戶恒岡權之介伊東元太郎爲小姓頭取
○十四日小姓頭取三浦贊男爲町奉行目附人見又左爲御本丸城小姓頭取
吉野英臣目附小普請市川市平今井新平爲小姓頭取友部八二郎賜月俸與
石河鐵次青山量四共事

同十二月○九日以大番頭佐藤圖書爲大寄合頭雜賀孫三郎致仕山本宇衛門
大番頭藤田彪賜足目百石服部久太夫槍奉行小姓秋田內膳勘定奉行安食
并小姓頭取徒頭鈴木鞞負小十人頭小姓太田誠在徒頭使番伊藤孫兵目附
小姓岡本友之介使番組頭雨宮三之介先鋒書院番關十兵小納戶長詰山中
五郎兵沒金奉行酒井市之允小國新三郎致仕矢野唯之允賜足目五十石
天保十三年壬寅正月○十日世子大傳兼執政近藤禮文沒年五十一○十一日
以少傳太田傳衛門爲本席

同二月○廿三日命執政興津能州兼世子大傳

同三月○十四日以參政武田正生爲大番頭々々々肥田大介爲執政以參政結城寅壽執政命太田丹州永詰限以三年

同四月○四日興津能州至自水戶○四日以大番頭大場彌右用人今井金右爲參政書院番頭岡田大番頭○六日高松侯危篤○十一日以寄合指引大森河方爲新番頭小姓藤田主膳徒頭小十人頭鈴木鞞寄合指引書院番頭渡邊甚藏小納戶鶴殿平太衛使役○十四日以近藤造酒衛爲旗奉行小姓鳥居芦澤總使番中奧小姓白井八十郎杉浦善次郎國分五郎藏小姓門奈田宮使役小監本郷大二郎小十目付馬場祐介小十人竹谷忠衛門免遠慮○十六日高松侯賴恕卒_{四十}_五

同五月○廿四日以大番頭市川爲大寄合頭書院頭寬大番頭小姓頭雜賀書院頭目附吉野用人兼厩方支配持頭萬澤槍奉行徒頭松平小十人頭大番酒泉中奧小姓使役鶴殿平書院組頭厩別當松平亘使役小普請山本三郎左河津安介並書院番吟味矢島馬廻寺社役秋山茂三郎吟味役小普請生井幾衛門

同朋列借樂園勤○廿四日太田丹波至自水戶

同六月○朔以次番河合覺大夫爲庭奉行馬廻松本三平金奉行小十古川茂衛馬廻○二日以寄合差引藤田爲小姓頭○三日禁所謂東百官命俗稱先是寬政以來俗稱云某右衛門者皆去右字蓋一則避右衛門督一則以去右字於稱呼與有右字不殊遂去右字至是諭之於諸士二人往々加右字 先是士人宜畜馬者或養駒有事則貸馬於 公厩至是不許以養駒於公厩唯其馬有病者許之○十九日始置太田城留守以久木清太夫爲兼知西山舊蹟事賜久木職田五十石班於寄合指引 長尾介五郎致仕別給月俸移居於西山舊蹟先是舊蹟爲久昌寺子院所管至是始清潔矣○廿九日令大寄合頭增與力一騎通前爲三騎

同八月○十二日世子少傳山口直沒年六十

同九月○六日增先鋒隊長二員爲十四人○二十日先是士人妻女或服一種異服名曰半點者蓋市井匹婦嘗着襯衣於表習以成風遂及士人妻女至是禁之

違者科料 禁庶人在官者服野羽織復寬政辛亥之令也○廿五日以太田丹波守庶子信濃介承遠山氏就丹波祿二千石願二百石賜信濃介為小姓因丹波之願也

同十月○十一日罷根本安松助教為諸公子伴讀吉田為歌道懸宇留野免訓導○十二日飛田賜役料五石訓導皆賜三石以青山量四石河鐵二為權訓導○廿二日以目付友部為世子少傅

同十一月○晦以少傅杉山為教授賜職田五十石以小姓頭橫山代之

同十二月○二日友部至自水戶○廿四日以馬廻市毛谷衛門為大番命射術教授以鈴木子之吉為步士導訓是日賞繩奉行成功各賜白銀有差更召其人於白書院手賜親筆經語初繩奉行三十二人而或轉職或中免是日拜賜者凡四十六人○廿六日是歲壬寅與 東照公生年同支干是即 公誕辰以故殿中皆用禮服○廿八日賞高久源吾賜親筆及白銀源吾嘗為繩奉行

天保十四年癸卯正月○十七日以右筆濱野熊五郎為馬廻兼訓導久米彥介馬

繩奉行拜賜 姓名 津田孝之介 朝倉清七 柳木三郎 柳木五郎 柳木七郎 柳木八郎 柳木九郎 柳木十郎 柳木十一郎 柳木十二郎 柳木十三郎 柳木十四郎 柳木十五郎 柳木十六郎 柳木十七郎 柳木十八郎 柳木十九郎 柳木二十郎 柳木二十一郎 柳木二十二郎 柳木二十三郎 柳木二十四郎 柳木二十五郎 柳木二十六郎 柳木二十七郎 柳木二十八郎 柳木二十九郎 柳木三十郎 柳木三十一郎 柳木三十二郎 柳木三十三郎 柳木三十四郎 柳木三十五郎 柳木三十六郎 柳木三十七郎 柳木三十八郎 柳木三十九郎 柳木四十郎 柳木四十一郎 柳木四十二郎 柳木四十三郎 柳木四十四郎 柳木四十五郎 柳木四十六郎 柳木四十七郎 柳木四十八郎 柳木四十九郎 柳木五十郎 柳木五十一郎 柳木五十二郎 柳木五十三郎 柳木五十四郎 柳木五十五郎 柳木五十六郎 柳木五十七郎 柳木五十八郎 柳木五十九郎 柳木六十郎 柳木六十一郎 柳木六十二郎 柳木六十三郎 柳木六十四郎 柳木六十五郎 柳木六十六郎 柳木六十七郎 柳木六十八郎 柳木六十九郎 柳木七十郎 柳木七十一郎 柳木七十二郎 柳木七十三郎 柳木七十四郎 柳木七十五郎 柳木七十六郎 柳木七十七郎 柳木七十八郎 柳木七十九郎 柳木八十郎 柳木八十一郎 柳木八十二郎 柳木八十三郎 柳木八十四郎 柳木八十五郎 柳木八十六郎 柳木八十七郎 柳木八十八郎 柳木八十九郎 柳木九十郎 柳木九十一郎 柳木九十二郎 柳木九十三郎 柳木九十四郎 柳木九十五郎 柳木九十六郎 柳木九十七郎 柳木九十八郎 柳木九十九郎 柳木一百郎

小池水之介 遠藤九郎 菊池酒藏 里見宗三郎 馬場祐介 其餘三十二人 人在己亥九月 月凡四十九人 七人其一十人 為高久源吾 時在江戶

廻訓導如故○廿五日江邸小鬻開館會者三百餘人

同二月○二十日以書記魁鳴志田傳五郎為規姬君奧番組頭書記立花源六小

梅藏奉行○廿三日以書記石川勝藏為魁移江戶

同三月○十五日公發水戶○十八日公參府

同四月○十日公發駕○十三日大將軍發駕○廿一日大將軍還城○廿三日公

歸邸

同五月○十八日公登營謁大將軍於御座間褒賞具至賜金裝刀及鞍鐙黃金百

枚

同六月○十三日公乘船而發

同八月○廿一日改 東照宮祭儀以靜及吉田祠宮奉紀以二月十二日為祭日

四月十七日則遇密八音

同九月○四日目附平尾班於槍奉行○十五日以藤田彪掌學校開館事辛丑之

は假多近年將大開館延他邦之士云 ○二十三日以參政今井為寺社奉行々々々萩庄馬廻頭

兼大廟事小姓頭白井參政目付小山小姓頭郡宰鈴木御用調役吟味秋山馬
廻西郷監物罷大廟事○二十六日以會計石河爲郡宰以書記魁石惣代之
同閏月○九日以會計谷佐衛門爲御用調役以書記魁矢野爲會計右筆組頭平
松茂介爲書記魁○十四日移岩舟願入寺於久米又復向山常福寺於瓜連廢
三昧堂賜太田村淨光寺白銀十枚○十六日以國友與五郎爲寺社役
同十月○朔以馬廻松本十兵爲大番頭○朔以青山延光爲小姓頭兼教授頭取
飛田勝班小納戸教授青延壽石幹脩步兵兼訓導小普請三橋七十郎岡本六
之助鎌倉奧番○八日以友部八五郎爲步士兼訓導以小監高野九郎兵小十
人

同十一月○十八日以小姓頭取岡野行馬爲世子少傅○二十二日以小十三輪
友衛爲奧右々々石川新吉吟味大森惣衛門并賜役料五兩

同十二月○十日以公事奉行三浦贊男爲使番近藤造酒衛目付小納戸武石清
八書院組頭賜足高五十石田丸稻致仕賜兩番之祿不能百石及俸金十五兩

者百石積以小十目付和田善太郎爲吟味役高島雄三郎小監

天保十五年甲辰正月○元日朝賀使士大夫各服其命服○廿五日執政戸田以

公事至自水戸

同二月○十五日以服部久大夫爲旗奉行朝比奈七郎右衛門爲槍奉行渡邊伊

衛門持頭蔭山四郎兵先鋒高倉介衛管庫

同三月○九日公手賜士大夫知行朱印○十二日介冑謁見如例○十二日東照

宮大祭以二條公夫人喪也○十五日世子代 公手賜士大夫知行朱印○二十

二日蒐于千波原四方來觀者數萬人

同四月○十六日中山備州應招詣閣老阿部氏○十七日又詣阿部氏○十八日

閣老授奉書○十九日中山又詣阿部氏○二十八日中山備州詣閣老土井氏

同五月○五日公參府○六日公致仕世子襲封即日公移駒込是夜中山備州與

津能州差扣戸田銀藤田彪奪職蟄居皆 幕府之命也○九日山野邊兵庫指

扣鶴殿平七奪職逼塞今井金六奪職禁錮○十日曉大雨大城火○十七日以

白石又右衛門御用調役増五十石班先鋒之上
○十七日以興津藏人爲執政
○廿二日守山侯代鶴千代麿君登 城謝襲封

昭和九年六月二十日印刷
昭和九年六月廿五日發行

水戸藤田家舊藏書類第三

非賣品

不許
複製

後藤英郎藏版

東京市四谷區新堀江町三番地

日本史籍協會代表者

發行
印刷
者兼

早川良吉

64
257

終